

『マビノーギ』研究(10)

——「エヴラウグの息子ペレドルの物語」をめぐって——

中 野 節 子

十四世紀から十五世紀にかけて、ウェールズの地でまとめられたと考えられている散文物語集『マビノーギ』(Y Mabinogi)の十一編の物語の中には、五編のアーサー王物語の原型とおぼしき物語が含まれている。最も古く書き留められ、同時に最も良くウェールズ土着の語りものの性格を残していると考えられる「キルーフとオルウェン」(Culwch ac Olwen)、そして絢爛たる語りものの形式美を誇る「ロナブイの夢」(Breuddwyd Rhonabwy)に続くのが、「フランス風のアーサー王ロマンス」に分類される三編の物語、「泉の貴婦人の物語」(Chwedyl Iarlles y Ffynawn)、「エヴラウグの息子ペレドルの物語」(Historia Peredur vab Efrog)、そして「ヘルビンの息子ゲレイントの物語」(Chwedyl Gereint vab Erbin)である。これら三つの物語は、いずれも十二世紀フランスの宮廷詩人クレチアン・ド・トロワ(Chretien de Troyes)の韻文詩「イヴァン・ライオンの騎士」(Yvain, ou le Chevalier au Lion)「ペルシヴァル、聖杯の物語」(Perceval, ou le Conte du Graal)として「エリックとエニッド」(Eric et Enide)に相当する。イヴァン(Yvain)とはウェールズ名のオウエイン(Owein)に当たり、「泉の貴婦人の物語」に登場する主人公の騎士である。ウェールズの三つの物語は全て、ノルマン・フランス風のロマンスものの影響を強く受けて成立していることは否定できないところであるが、最初の

「オウエイン」物語には、ウェールズ語の特徴を生かして展開されてゆく、大胆で直截な語りの中に、ウェールズ物語文学の最高水準の技術が垣間見られる。しかし続く「ペレドル」の物語には、最後に置かれた「ゲレイント」の物語で顕著となる、退屈な形式主義の陰りはまだ見えてはいないとはいえ、構成的にもいささか散漫で統一を欠く物語となっていることは否めない。圧倒的な影響力をもって迫ってくる、抗いがたい魅惑に富むノルマン・フランス系の大文化の洗礼を受けて、無残にもその独自性を失い、変容してゆくウェールズ文学の様をまざまざと見せつける三つの物語である。

現存する完全なテキストは二種類ある。一つは、『レゼルッフの白い本』(Llyfr Gwyn Rhydderch)のコラム一七から一七八までを占める部分であり、これは「ベニアルス(Peniarth)4」と呼ばれているもので、十三世紀の終わり頃から十四世紀の中頃までに書き留められた文献と考えられている。もう一つは、成立は十四世紀末と想定される『ヘルゲストの赤い本』(Llyfr Coch Hergest)のコラム六五五から六九七までのテキストである。なお『白い本』のコラム一四四、そして『赤い本』のコラム六七四までのところ、すなわち内容的には「黄金の手をもつアンガラッド」の物語までのところには、正字法や段落の区切り等にわたって、かなり大きな違いが見られる。しかしながら、それから後の部分においてはこの不一致は解消され、

両テキストが目立った相違はなくなっていることが分かる。したがってこれら二つのテキストは、大筋のところで一致しているところから、同じ原本からの写本であろうと考えられているのである。

以上の二つの完全なテキストの他に、『白い本』には、遅くても十四世紀の始め頃までには成立していたと見なされる「ベニアルス7」の写本からのものとおぼしき部分(コラム六〇五から六四八まで)と、十四世紀中頃のものと考えられる「ベニアルス14」の写本からの断片(コラム二八六から二九〇まで)とが加わっている。これら二つの写本は、殆ど時を同じくして『白い本』に加えられたと見なされるが、正字法や各挿話の順序等の多くの点から言えることは、「ベニアルス14」は「ベニアルス7」の直接の写しではなく、独立した別々の文献からの写本であろうということである。前者はほんの断片に過ぎなく、主人公エヴラウグの北の伯爵領への旅の開始から始まり、二番目の叔父の宮廷に到着した所で終わっている。後者は冒頭の部分を欠いているとはいえ、天幕の娘が主人公エヴラウグを食卓へ招くところから始まり、その終わりがペレドルと女帝との十四年間にわたる統治の物語の、かなりまとまったテキストであることが分かる。また前述の完全なテキストではオウエインによって演じられているペレドルの友人と助っ人の役目が、この二つの文献ではグアルッフメイのものになっているといった共通の特徴をもっていることや、ケイに対する呼び掛けの言葉が、古いウェールズの文献中にしか見られない、「ケナルの息子ケイ」(Cai fab Kynyr) となっていること等からも、より古く成立したテキストであろうと推定されているのである。また「ベニアルス7」の文体は真に生き生きしており、元来のウェールズ口承文学の語りの伝統を感じさせられるものとなっていることも、特記すべきことであろう。

I

エヴラウグの息子ペレドルの物語⁽²⁾

エヴラウグ伯爵は北に所領を持っており、七人の息子があった。彼はただ自分の所領を維持するにとどまらず、専らトーナメント試合や戦闘や戦いに憂き身をやつしていた。しばしば戦いに赴く人の常で、自分もそこで命を落とし、彼の息子たちも死んでしまうこととなった。七番目の息子はペレドルと言った。彼は七人の中で一番若い息子であった。しかしまだ、戦いや戦争に行く年令には達していなかった。そんな年令に達していたら、彼も父や兄たちと同じように命を落としていたことであろう。

この子には賢く思慮深い母があった。彼女は息子と所領のことを思いめぐらした。考えた末、この息子と共に人の気配のない荒野に逃れ、暮すことにした。身の回りには、女や子ども、そして戦いや戦争には適さない心穏やかな人のみを置いていた。彼女の息子の耳に入るようなところでは、誰一人として軍馬や武器のことを語る者はいなかった。彼の心がそんなものに傾いてしまうことを恐れたからであった。そこで少年は毎日、深い森に出かけて遊んだり、ひいらぎの矢を投げたりして過ごしていた。

ある日のこと、少年が母親の持ち物の山羊の群れを見てみると、この山羊たちの側に、二頭の雄鹿がいるのが目に入ってきた。少年はこれら二頭の角の無い動物と、それぞれに角をもつ側の動物を見比べて、驚いて立ちつくしていた。それから、彼らは長いこと迷子になっていて、そのために角を無くしてしまったのだらうと考えた。そして持ち前の足の力と早さを使って、森の外れにある山羊たちの家へと雄鹿を追いついた。それから少年は、家へ帰って来た。

「母さん」と彼は言った。「この近くで、奇妙なものを見つけました。あなたの二頭の山羊が正気を失い、森の中を長いこと彷徨っていたために、角を無くしてしまったと見えます。彼らを追い込むために本当に苦労してしまいました。」

そこで皆が腰を上げ、それを見にやって来た。雄鹿を見ると、彼らを追

込むことができた力強く早い足を持っている者がいることに、心から驚いた。

ある日、三人の騎士たちが森の脇の乗馬道を通って行くのが見えた。グアルの息子グアルフメイ、(Gwalchmei uab Gwyar)、グウェステイルの息子グウィル、(Gweir uab Gwestyl)、そしてウリエンの息子オウエイン、(Owein uab Uryen)であり、オウエインはアーサー王の宮廷で林檎を配った騎士を追っていたため、彼らのしんがりを務めることになっていた。

「母さん、」と少年は言った。「あそこに行くのは、どんな人たちなのですか？」

「息子よ、天使たちですよ。」と彼女が答えた。

「私も天使の一人となって、あの方たちと一緒にいきたいものです。」とペレドルは言い、彼らに会うために道へ出て行った。

「友よ、答えておくれ。昨日か今日、ここを一人の騎士が通って行くのを見なかったかね？」とオウエインが言った。

「騎士と言うのがどんな方なのか、私には分かりません。」と少年が答えた。

「私と同じ様な者のことだよ。」とオウエインが言った。

「私がお尋ねすることに答えて下さったら、お返しにあなたが知りたいことを申しましょう。」

「いいとも。喜んでそうしよう。」とオウエインが言った。

「それは何なのですか？」と鞍をさして少年が尋ねた。

「鞍というものだよ。」とオウエインが言った。

ペレドルは、それぞれどういいうもので、どんなことをするために作られ、それらで何をするのかを聞き出した。オウエインは少年に、それぞれがどんなもので、どんなことをするためのものであるかを、充分に話してやった。

「この道を真っ直ぐ進んでお行きなさい。」とペレドルは言った。

「あなたがお探しの様な方を見ましたよ。私も直ちに一人の騎士として、あなたの後に続いて行きます。」

それからペレドルは、母と取り巻きの人々のいるところへ戻って行っ

た。

「母さん、」と彼は言った。「あの方々は天使ではなく、騎士ですよ。」

彼女は死んだように、気を失って倒れてしまった。そしてペレドルは、薪を運んだり、人の住んでいるところから荒野まで、食べ物と飲物を運んでくるために使われる馬のいるところへやって来た。それから一番強靱そうな、青白く、白と黒の斑のある痩せこけた馬を引き出し、それに鞍の代わりに荷籠を乗せたり、馬の装備に似たような物を取りついたりした。そして母親の居るところへと戻って来た。

すると、見よ、伯爵夫人は正気を取り戻していた。

「ああ、」と彼女は言った。「あなたは、出てゆきたいのですね。」

「ええ、そうなのです。」と息子が言った。

「出発する前に、ちょっと待って、私の言うことをお聞きなさい。」

「言ってみて下さい。」と息子が言った。「早くして下さいよ。ちょっとだけ待ちますから。」

「真っ直ぐに、アーサーの宮廷へお行きなさい。」と彼女が言った。「そこには、最も寛大で勇敢な最高の方々がおられます。教会を見たらどこでも、主の祈りを唱えるのです。食べ物と飲物を見たら、必要とするときにいつも心からの歓待をもって供されるというわけではないので、自分に取って置くのです。叫び声を耳にしたら、そしてとりわけそれが女性のものであれば、すぐにそちらへ向かって行きなさい。美しい宝石を見つけたら、それを取って他の人におあげなさい。そうすることによって評判が良くなることでしょう。美しい女性に会ったなら、たとえその方が貴方を望んではいないとしても、恋をするのです。そうすることによって、あなたは以前よりもずっと高貴で善良な男性となることでしょう。」

そこで少年は、手に一杯の鋭い投げ矢を持って出発した。二日と二晩、食べ物も飲物もとらずに、人気のない荒野を旅して行った。やがてとても大きな寂しい森へとやって来た。森の奥深く、野原のように見える空き地があるのが見えた。空き地の中には一つの大きなテントが見え、少年は教会であろうと考えて、そこで主の祈りを唱えた。テントの入口は開いていて、戸口の近くに金の椅子が置いてあり、亜麻色の髪をした娘が座っていた。額には金の飾りバンドをつけ、きらきらと輝く石がとめられており、

手には分厚い金の指環をはめていた。

ペレドルは馬から下りて、中に入って行った。娘は彼を喜んで迎えて挨拶し、テントの端にはテーブルがあり、ワインをなみなみと注がれた水差し、二つの白パン、しゃぶって食べるための新鮮なあばら骨付きの豚肉があるのが目に入った。

「私の母が、」とペレドルが言った。「どこであらうと、食べ物と飲物を見たら、それを取るようにと申しました。」

「それなら進んで行って、殿様。」と娘が言った。「テーブルのところへ行らっしゃいませ。神様があなたを喜んで迎えてくれることでしょう。」

ペレドルはテーブルのところへ行き、食べ物と飲物の半分を自分のために取り、残りの半分はこの娘のために残しておいた。食べ終わると立ち上がり、娘のいるところへ戻って来た。

「私の母が、」と彼が言った。「どこであらうと、美しい宝石を見たら、それを取りなさいと申しました。」

「それではお取り下さい、友よ。」と彼女は言った。「あなたには、それを惜しみはいたしません。」

ペレドルはその指輪を取り、ひざまずいて娘に接吻し、馬を引いて出立して行った。

すると、見よ、この大テントの持ち主である騎士がやって来た。彼は「空き地に住む誇り高き者」と呼ばれていた。騎士は馬の足跡を見つけた。

「さあ、言うがよい。」と娘に言った。「今までここにいたのは、どういう者なのだ。」

「奇妙な風体をしたお方です、お殿様。」と彼女は答え、ペレドルの様子と彼の振る舞いとを話した。

「さあ、言うがよい。」と彼が言った。「お前とそ奴の間に、何かあったのかね？」

「誓って、何もございませんでした。」と彼女は言った。

「とても信じるわけにはゆかぬ。私がそ奴に会って、恨みを晴らし辱めてやるまでは、とてもお前と同じところで一つになって過ぐすわけにはゆかないのだ。」

それから騎士は立ち上がり、ペレドルを探す旅に出て行った。

一方ペレドルは、アーサーの宮廷の方角に向かって歩を進めて行った。しかし彼がアーサーの宮廷に辿り着く前に、別の騎士がやって来て、自分の馬を持っていてもらうために、入り口のところにいる男に厚い金の指輪を渡したのであった。そして騎士自身は、アーサーと彼の随員、そしてグエンヒヴァル (Gwenhwyfar) と彼女の侍女たちがいる広間へと入って行った。ちょうど部屋付きの給仕たちが、杯からグウエンヒヴァルに、盛んに給仕しているところであった。騎士はグウエンヒヴァルの手から杯を取り上げると、入っていた液体をグウエンヒヴァルの顔と胸にかけ、横面を激しく張り倒した。

「もしここに、」と彼は言った。「この杯とグウエンヒヴァルへの無礼な行いに対して、私と戦おうと言う者がいたら、草原へついてくるがよい。そこで待ってようぞ。」

そして騎士は馬に乗り、草原へと向かった。すると一同の者は、深く頭をたれて、グウエンヒヴァルに加えられた侮辱への仇をとって来るようにと命じられないようにし、力と勇気、または魔法と呪文を持った者でなければ、とてもあの様な暴挙を振るうことなど出来ないだろうと考えていた。その結果、誰一人として彼に恨みを晴らしてやろうという者はなかったのである。

そんなとき、見よ、青白い、白と黒の斑模様痩せた馬に乗り、野暮な締めりのない馬具を着けたペレドルが、広間へ入って来た。宮廷中でも、ひと際目だつて情け無い姿であった。そしてケイ (Cei) が広間の真ん中に立っていた。

「もし、」とペレドルが言った。「そこの背の高いお方、アーサーはどこにおられるのですか？」

「一体アーサーにどんな用があるのだ。」とケイが言った。

「私の母がアーサーのところへ行き、騎士として任じてもらえと命じたのです。」

「それにしても、その馬といい馬具といい、余りにもだらしなない風体でやって来たものだ。」とケイが言った。

そこで一同は、ペレドルの様子に目を止め、からかったり棒切れを投げ

たりし、こんな男が来てくれたことを喜んだ。これですっかり、先程の一件は忘れてしまえると思ったからであった。

するとそこへ、見よ、あの小人たちがやって来た。今から一年前、女と男の小人が連れ立って、アーサーのところへ挨拶に来ていたのである。アーサーは彼らを受け入れてやった。けれどそれにもかかわらず、一年の間二人は、まだ誰とも一言も喋ってはいなかった。その小人が、ベレドルを見ると、

「おや、まあ、」と彼は言った。「よくいらっしやいました。戦士の中の長、騎士の中の華である、エヴラウグの息子、立派なベレドル様。」

「まったくのところ、」とケイが言った。「何という衝撃だろう。アーサーの宮廷で、一年の間何も喋らずにいた奴が、話相手と飲み相手を自由に選べるようになって、皇帝と一同の者の面前でこんな男を戦士の中の長、騎士の中の華などと呼ぼうとは！」

そしてケイは小人の横面を張り倒し、その結果小人は頭から床に倒れ、死んだように意識を失ってしまったのであった。

すると、見よ、女の小人が進み出た。

「あら、まあ、」と彼女は言った。「神様が歓迎なさるでしょう。戦士の中の華、騎士の中の灯である、エヴラウグの息子、立派なベレドル様。」

「やい、女。」とケイが言った。「まったく嘆かわしい衝撃というものだ。一年の間というものの、アーサーの宮廷で啞のように黙っていて、誰とも一言も口をきかずにいたのに、今日になってアーサーと戦士たちの面前で、こんな男を戦士の中の華、騎士の中の灯などと呼ぼうとは！」

そして彼女を捕まえ、死んだようになって気を失ってしまうまで、蹴ったのであった。

「背の高いお方、」とベレドルが言った。「教えて下さい。どこにアーサーがおられるのですか？」

「つべこべ言うな。」とケイが言った。「今、草原へ出て行った男を追いかけて、杯を取上げ、奴を倒して馬と武器を取って来い。それから後で、騎士として任じてやることにしよう。」

「背の高いお方、」とベレドルが言った。「そういたします。」

それから彼は馬の頭を返し、外の草原へ向かったのであった。

そこへやって来ると、あの騎士が、力と武勇を誇らかに誇示しながら草原で馬を乗り回していた。

「おい、」とその騎士は言った。「私を追って、宮廷から誰かやって来るのを見なかったかね？」

「そこにいらした背の高いお方が、私にあなたを倒し、独力で、杯と馬と武器とを取って来るようにとおっしゃったのです。」

「口を慎むがよい。」と騎士が言った。「宮廷に戻り、私の名にかけて、アーサーか他の者がここにやって来て、私と槍試合をするように伝えよ。すぐに来なければ、もう待ってはやらんと言うのだ。」

「さあ誓って、選んで下さい。」とベレドルが言った。「あなたのお許しが戴けても戴けなくとも、私はその馬と武器と杯を貰い受けますよ。」

すると騎士は怒ってベレドルを押しつけ、槍の先で、肩と首の間に手痛い一撃を与えた。

「あなた、」とベレドルが言った。「私の母のところの召使は、そんなふうに私とは戯れませんよ。こんなふうにするのです！」

そして鋭い切っ先の槍で騎士に狙いをつけ、目をめがけて打ち、その結果、槍は首のうなじのところを貫き、騎士は石のようになって地面に倒れてしまった。

「まったくのところ、」とウリエンの息子オウエインが、ケイに言った。

「あの愚かな男に、騎士の後を追わせたのは、悪意のあるやり方ですよ。それによって、二つの一つの結果が生じることになるからです。

すなわち、奴は打ち負かされるか、殺されてしまうかなのです。打ち負かされてしまえば、騎士は彼をそれだけの位にある者と判断し、それはアーサーと戦士たちに対しての、尽きることのない不名誉となることでしょ。もし殺されたりしたら、不名誉なことになるばかりか、それ以上にその罪があなたにかかってくることでしょ。私が行って、事の次第がどうなったかを見届けてこなければ、面目も立たないというものです。」

それからオウエインは草原へとやって来た。するとベレドルが男の体を引きずって、草原を進んで来るところであった。

「お待ちなさい、あなた。」とオウエインが言った。「私とその鎧をはずしてあげます。」

「どうしても、」とベレドルが言った。「この鉄の胴着がとれないのです。この人の体の一部になってしまっているようです。」そこでオウエインが鎧と衣服をはずしてやった。

「さあとうとう、友よ。」と彼が言った。「これであなたのための馬と武器ができましたよ。以前のものよりずっといいものです。喜んでこれに身に着け、騎士に任じてもらいに、私と一緒にアーサーのところへ参りましょう。」

「このまま参りましたら、私は面目を失うかもしれません。この杯をグウエンヒヴァル様のところへお届けし、どこにおりましょうとも、私はアーサーの家来であるとお伝え下さい。何かお役に立つことがありましたら、何なりといたします。そして、そこにいらっしゃる背の高いお方にお目にかかって、あの小人の男女に対する無礼へのお返しをするまでは、宮廷には決して行かないとお伝え下さい。」

それからオウエインは宮廷に向かい、その出来事をアーサーとグウエンヒヴァル、そして臨席する一同に伝え、ケイに警告を与えたのであった。そしてベレドルは再び、自分の道を進んで行った。

しばらく行くと、見よ、一人の騎士がベレドルに向かって来た。

「どこから来たのか？」と騎士が尋ねた。

「アーサーの宮廷からです。」と彼が答えた。

「アーサーの臣下の者か？」と騎士が言った。

「はい、確かに。」と彼が言った。

「ここで、アーサーのことを口にするとは全くだいしたものだ！」

「どうしてですか？」とベレドルが尋ねた。

「教えてやろう。」と彼が言った。「俺様は、今までアーサーの物を盗んだり横取りして過ごしてきたのだ。出くわした家来は、誰彼かまわず皆殺してやったのだ。」

二人が出会ってほどなく、ベレドルがこの騎士を投げ飛ばし、彼は馬のくつわから地面へと落ちてしまった。騎士は助命を求めた。

「命は助けてあげます。その代わりアーサーのところへ行つて、彼への名誉と奉仕のために、私があなたを負かしたことを伝えたと約束して下さい。そして、そこにおられる背の高い方にお目にかかって、あの男女の小

人の仇をとるまでは、決して宮廷には足を向けないと伝えるのです。」騎士はそのことを誓うと、アーサーの宮廷へ向かい、自分が遭遇したことを詳しく告げ、ケイに警告を与えたのであった。

ベレドルは旅を続けた。そして同じ週の中に、十六人の騎士たちと出会い、それぞれを打ち負かし、最初に負かした騎士と同様、同じ話とケイへの警告とを持たせて、アーサーの宮廷向かわせた。その結果、ケイはアーサーと一同の非難を浴びるようになり、今やそのため思い悩むようになった。

ベレドルは旅を続けた。そしてついに、大きな荒涼とした森に出くわした。森の端には湖があり、向こうの岸には大きな宮廷が、そしてその周りを堅固な城壁が囲んでいた。湖の岸には白髪の男がいて、絹の錦織のクッションに座り、絹の錦織の衣装を身に纏い、湖の上では二人の若者が魚釣りをしていた。白髪の男はベレドルのやって来るのを見ると、立ち上がって宮廷の方に向かって歩みを進めた。男はびっこを引いていた。ベレドルも又宮廷へと向かい、門が開けられ、大広間へ入って行った。入って行くと、その白髪の男が絹の錦織のクッションに座り、大きな明々とした火が燃えていた。何人かの者が立ち上がり、ベレドルを出迎え、彼を助けて馬から降ろし、鎧を脱ぐのを助けてくれた。するとその男は、クッションの端から手を下ろして客人を招き、クッションの上に座するようにと要請した。二人は一緒に腰を下ろして語り合った。時間になると、食卓の準備が整い、食事が始まった。そしてベレドルは、この男の傍らに座り、食事を楽しんだ。食事が終わるとその男がベレドルに、短剣の投げ方を知っているかと尋ねた。

「知りません。」とベレドルが言った。「私が教えてもらった投げ方ならば、当然承知しておりますが。」

「そうですね。」と彼が言った。「棒切れと楯が使いこなせる者なら誰でも、短剣の投げ方は分かるはずですよ。」

白髪の男には二人の息子がいた。黄色い髪の子と亜麻色の髪の子であった。

「さあ、二人とも立って。」と彼は言った。「この棒切れと楯をあやつて見せてごらん。」

若者たちはそれで遊び始めた。

「さあ、友よ。」と彼が言った。「どちらが上手だと思われませんか？」

「私の意見では、」とペレドルが言った。「もしそうしようと思えば、あの黄色い髪の若者の方が、亜麻色の髪の若者よりも、長い間、相手に血を流させることができるのではないでしようか。」

「友よ、できれば亜麻色の髪の若者の手から棒切れと楯を取上げ、黄色い髪の若者の血を流させてみて下さい。」

ペレドルは立ち上がり、棒切れと楯を取り、黄色い髪の若者に向かって行った。その結果、彼の眉毛が目の上にかかり、血が筋となって流れ出した。

「ああ、友よ。」と彼は言った。「ここへ来て座りなさい。あなたはこの島で最も優れた短剣の投げ手になりますよ。私こそ、あなたの母の兄であり、あなたの叔父に当たる者なのです。少しの間私と一緒にいて、行儀と作法を学びなさい。あなたは今や母親の言葉を離れるときなのです。そうすれば私があなたの教師となり、騎士に任じてあげましょう。これから、こうしなければなりません。何かおかしいことを見たりしても、それを見分けて追求しないことです。教えてもらうまで待つのです。その咎はあなたではなく、教師である私にあるのですから。」

そして皆があらゆる種類の名誉と歓待を与えてくれ、時が来ると一同は眠りについた。

日が明けるやいなや、ペレドルは起き上がって馬を引き、叔父の許可を得てすぐに出発し、大きな森へやって来て、森のはずれにある平らな草原に辿り着くと、向こう側に巨大な城壁と立派な宮廷があるのが見えた。ペレドルは宮廷へ向かい、扉が開いているのを見ると、広間へと入って行った。入って行くと、広間の片側に白髪の男が座り、男の周りには沢山の郷士たちがいて、皆が彼を迎えて立ち上がり、素晴らしい丁寧さでもてなしてくれたのであった。彼は、喜んでこの宮廷の持ち主である男の側に座わり、二人は話を始めた。食事の時間が来ると、彼はこの高貴な人の脇に座を占めることになった。心ゆくまで食べたり飲んだりした後で、その高貴な人が彼に、短剣の投げ方を心得ているかと尋ねた。

「教えていただけるなら、」とペレドルが言った。「心得られるだろうと

思いますが。」

大広間には、戦士がやっと抱えられるような、大きな鉄製の円柱が立っていた。

「あそこにある短剣をとって、」と男がペレドルに言った。「あの鉄の円柱を打ってごらん。」

ペレドルは立ち上がり、円柱めがけて投げると、円柱は二つに砕け、短剣も又二つになってしまった。

「かけらを合わせて、元に戻しなさい。」

ペレドルがかけらを合わせると、元に戻った。もう一度円柱に投げ、円柱は二つに、そして短剣も二つに割れてしまった。そして再び元に戻された。三度目に円柱に投げ、円柱を二つに砕き、短剣も二つにしてしまった。

「かけらをもう一度集めて、元に戻しなさい。」

ペレドルは三度目にかけらを集めたが、もう円柱も短剣も元には戻らなかった。

「さあ、あなた。」と男が言った。「ここへ来て座りなさい。神の祝福があらんことを。あなたはこの国でもっとも優れた投げ手です。三つのうちの二つの力をあなたはすでに使い、三番目はこれからです。それらを全部使い果たすと、もう終わりということになることでしょう。私こそあなたの叔父の一人、母上の兄であり、あなたが昨晩泊まった、あの宮廷の所有者の弟なのです。」

ペレドルは彼の叔父の側に座り、二人は親しく話し合った。

それから二人の若者が広間に入って来て、まっすぐ部屋へと進んで来るのが見えた。とてつもなく大きな槍を持ち、三筋の血潮が、槍の受け口の部分から床へ流れていた。このようないでたちで若者が入ってくるのを見ると、一同は叫び声と悲しみの声を上げ、耐え難い程となってしまう。そんな中でもこの男は、ペレドルとの会話を中断しようとはしなかった。彼は事情をペレドルに説明しようとはせず、ペレドルも又尋ねようとはしなかった。それから、しばらくの間沈黙があった後、見よ、二人の娘が入って来た。大きな金属製の盆を持ち、その盆の上には男の首が乗っており、大量の血が首の周囲に流れていた。そこで皆が悲鳴と叫び声を上げ、

この家の中で、彼らと同じように平然としておられる者は無いようになつた。ついに彼らは会話を止め、思う存分腰を落ち着けて、飲み込んだ。それからベレドルのために部屋の手意がなされ、一同眠りについたのであつた。

翌朝早くベレドルは起き上がり、叔父の許しを受けて、出発した。とある森へと進むと、森の中深いところから悲鳴が聞こえてきた。悲鳴の起こった所まで来ると、美しい亜麻色の髪をした女がいて、彼女の側には鞍を置いた馬がいた。彼女は両手で男の亡骸を抱え、鞍に乗せようとするのだが、地面に落ちてしまふのだった。そこで悲鳴を上げていたのであつた。

「ああ、御婦人、」とベレドルが言った。「一体なぜ、そのように叫んでおられるのですか？」

「ああ、呪われたベレドル。」と婦人は言った。「あなたからは、私の苦しみのほんの僅かのなぐさめも、いただけないでしょう。」

「なぜ、」とベレドルが言った。「私は呪われねばならないのです？」

「あなたのせいで、お母上が死んでしまわれたからです。彼女の意に反してあなたが出て行ってしまわれたので、心を傷められ、それが原因で死んでしまわれたのです。あなたはどのように原因を作ったために、呪われているのです。あなたがアーサーの宮廷で出会われた男女の小人というのは、あなたの父親と母親の小人たちなのです。そしてこの私は、あなたの義理の姉に当たる者です。そして私の夫である人が、あの森の空き地にいた騎士に殺されてしまったのです。あなたも殺されてしまわないように、その人の側には近寄らないで下さい。」

「不当にも、私の姉よ。」と彼は言った。「あなたは私を非難していらっしゃる。今ではもう、こんなにも長くあなたと一緒にいてしまったので、私にはその人を倒せないでしょう。もっと長く一緒にいたら、その人を倒そうとは思わなくなるかも知れません。あなたも、もうこれ以上嘆くのはおやめなさい、というのも救いはずっと近くなっているのですから。この人を葬り、あなたと一緒にその騎士のいるところまでお供しましょう。そして、私が直接仕返しができるようになら、そういたします。」

埋葬を済ますと、二人は空き地で一人の騎士が馬を乗り回しているところ

ろまでやって来た。すぐに騎士はベレドルに、どこから来たのかと尋ねた。

「アーサーの宮廷から来たのです。」

「アーサーの家来の者か？」

「ええそうです。誓いますよ。」

「アーサーに対する忠誠の誓いをするには、うってつけのところに来たものだ。」

出会うやいなや二人は戦いを始め、すぐさまそこで、ベレドルは騎士を打ち倒した。騎士は助命を願ひ出た。

「命は助けて差し上げましょう。けれど次のような条件ですよ。この御婦人を妻に娶り、心を尽くして守って下さい。あなたが、この人のご主人を殺してしまったことを忘れずに。アーサーの宮廷へ出かけて行き、この私がアーサーの名誉と彼への忠誠を示すために、あなたを打ち負かしたことを話し、そこにいる背の高い男に出くわしたら、小人と娘への侮辱への仇をとるまでは、私はそこには行かないと告げるのです。」

そして騎士からの保証を取りつけた。そこで騎士は婦人を馬に乗せ、一緒に並んでアーサーの宮廷へやって来て、自分の遭遇した出来事を語り、ケイへの警告を与えた。そこでケイは、ベレドルのような優れた若者をアーサーの宮廷から追い出してしまったことで、アーサーや一同の者からの非難を受けたのであつた。

「あの若者は、この宮廷には決してやっては来ないでしょう。」とオウエインが言った。「ケイもまた、この宮廷からは出て行かないでしょうし。」

「確かに、」とアーサーが言った。「私が自分で、ブリテン島の荒野を探し、その若者を見つけよう。そして二人に決着をつけさせるのだ。」

ベレドルは旅を続け、大きな荒涼とした森へとやって来た。森の中で目にするものといったら、人間や獣の通う道ではなく、深く繁った草と植物の類であつた。森の外れまでやって来ると、藁で覆われた大きな城壁が目に入ってきて、その上には無数の塔が立っていた。入口のところには一際鬱蒼と植物が繁っていた。ベレドルは槍の先で門を打った。すると、見よ、瘦せた烏色の髪をした若者が、朝顔形の銃眼のところに現われた。

「次の二つから選んでください、殿よ。」と若者が言った。「門を開けましょうか。それともこの城の主人に、あなたがこの門のところにいるにやっっていることを伝えて来ましょうか。」

「私がここに来ていることを、お伝えください。中に入って欲しいと言われたなら、中に入りましょう。」

騎士はすぐに戻ってきて、ペレドルのために門を開け、彼は広間へと入って行った。広間に入ると、門を開けてくれた若者とよく似た、同じ背丈と風采、年令と衣装をした十八人の赤毛の若者の姿が見えた。彼らの礼儀とてなしは、丁重を極めるものであった。彼が馬から下りるのを助け、鎧を脱がせてくれた。そして皆で腰を下ろし、語り合った。

すると、見よ、五人の娘たちが部屋から出てきて、広間へ入って来た。一番位が高いと思われる娘は、確かに、ペレドルが今まで会った中でも最も美しいと思われる娘だった。身につけているのは、かつてはもっとまじだったと思われる、擦り切れた錦織の古い衣装であった。そこから透けてみえる彼女の肌は、最も白い水晶で作られた白い花よりも白かった。そして彼女の髪と眉毛は黒曜石よりも黒かった。頬には小さな二つの赤味がさしていて、それは考えられる限りの真紅だった。その娘はペレドルに挨拶し、彼を抱擁し、彼の脇に腰を下ろした。するとほどなく、二人の尼僧が入って来るのが見えた。一人はワインを一杯に満たした水差しを持ち、もう一人は六つの小麦パンを持っていた。

「ご主人様。」と二人は行った。「神様に誓って、もうこれ以上の食べ物も飲物も、向こうの尼僧院にはございません。」

そして食事が始まった。ペレドルは、娘の様子から、彼女がこれ以上の食べ物と飲物を、彼に差し出したがっているのが分かった。

「御婦人よ、食べ物と飲物を分けて、ただこうではありませんか。」

「いいえ、そんなふうにはなさらないでください、お殿様。」と彼女は言った。

「そうしないと、髭を携えている者の恥となりますよ。」と彼が言った。

ペレドルはパンを取り、自分の仲間に半分与え、杯の半分を量って相手に分けた。

食事が済むと、

「望むべくは、」とペレドルが言った。「気持ち良く眠れる場所があったら、嬉しいのですが。」

彼のための部屋が用意され、ペレドルは眠りについた。

「姉さん、」と若者たちがその娘に言った。「忠告があります。」

「どんなことですか？」と彼女は尋ねた。

「あなたの側の部屋に眠る、あの騎士のところへ行っちゃって、あの方の奥様か恋人のように、いかようにもあの方が望むようにして欲しいと申し出るのです。」

「そのようなことは、」と彼女が答えた。「とても出来かねます。男の方のことは何も知りませんし、あの方に望まれることもないのに、自分でそんな申し出をするなんて。そんなことはどうしても出来ません。」

「神様に正直に告白して、申しますが。」と彼らが言った。「もしそうなら、ここにあなたを残しておき、敵の意のままにするしかありません。」

そこで娘は立ち上がり、涙を流しながら、まっすぐ部屋へとやって来たのであった。ドアの開く音で、ペレドルが目を醒ました。すると娘が盛んに涙を流しながら立っていた。

「言ってごらんない。娘さん、」とペレドルが言った。「何でそんなに泣いているのですか？」

「申し上げましょう。お殿様、」と彼女が言った。「私の父がこの宮廷を所有し、その下で領地は安定しております。けれどある伯爵の息子が、父に私をくれるよう申し出たのです。私は自分の意思でその方のところへ行こうとは思わず、父もまた、私の意思に反してまでは、その方のところへもまた他の誰のところにも、やろうとは思わなかったのでございます。」

父には私の他に子どもはおりませんでした。そこで父の亡くなった後で、この領地が私のものとなったのです。けれど以前にもましてなおさらのこと、その方のところへは行きたくはございませんでした。そこでその方が私に戦いを挑み、この家以外のすべての領地を差し押さえてしまわれたのです。あなたが会われたあの若者たちは、私の養い親の息子たちなのです。彼らはとても勇敢で、おまけにこの家もきわめて頑丈にできておりま

したので、食べ物と飲物の残っておりまうちは、私たちはこの中に留まることができ、家も取上げられずにすんでいたのでございます。けれどそれも底をつくようになり、自由に領地や国中を動くことのできる、あの尼僧たちからの助け以外には、頼るものとしてありません。しかし今や、あの人たちも食べ物や飲物に困るようになってしまったのです。そして全勢力を投じて、伯爵がこの地にやって来るという明日も、すでに目の前に迫っているのです。もしあの方のものになったら、私の運命は、あの方の馬の世話をする馬丁たちにくれてやられるような惨めなものに終わることでしょう。そこで私は、お殿様、あなたさまの心のすむようにしていただこうと決心して、こうしてここに参ったのでございます。その代わり私たちをここから連れ出して下さるか、ここで守っていただきたいのです。」

「さあ、行っておやすみなさい、娘さん。」とペレドルが言った。「そのどちらもせずに、あなたをここに残して行くようなことはいたしませんよ。」

娘は戻って行き、床についた。

翌朝早く娘は目を醒まし、ペレドルの所へ来て挨拶した。

「神の御加護があらんことを、親しいお方。何か報せがあるのですか？」

「あなたさまが御機嫌良くいらっしゃられる限り、うまくいっています。あの伯爵が全勢力を引き連れてやって来て、この家を包囲しております。それぞれに槍試合をするよう呼びかけ合って、どのテントも騎士たちも大騒ぎでございます。」

「そうですか。」とペレドルが言った。「私にもまた、馬の用意をして下さい。行ってみましょう。」

馬に装備が施され、彼も立ち上がって草原へ向かった。そこにやって来ると、戦いの合図を掲げて、一人の騎士が馬を乗り回していた。ペレドルは彼を攻撃し、馬の鞍から地面に投げ倒してしまった。その日、ペレドルは多くの者を打ち負かし、午後、日も暮れる頃、特別な様子をした騎士が彼に向かってやって来た。しかしその男もまた、ペレドルに打ち負かされてしまった。男を助命を求めた。

「ところで、あなたは何者なのですか？」とペレドルが尋ねた。

「確かに。」と男は答えた。「私は、伯爵の軍隊の長を務めるものです。」

「あなたの支配下にある、あの伯爵婦人の土地はどの位あるのですか？」

「誓って申し上げますが、」と男が答えた。「三分の一でございます。」

「そうですか。」とペレドルが言った。「その三分の一の所領を、そのまま彼女に返すのです。そしてそこから得た利益も、そのまま返さない。今夜彼女の宮廷で、百人分の食べ物と飲物、そして馬と武器を用意するのです。そして自分の身を人質として差し出さない。この罰金を惜しむなら、あなたの命はありませんよ。」

そこで、命じられたようになされた。娘はその晩大変喜んだ。彼女の領地の三分の一が自分のものとなり、宮廷には充分な馬と武器、そして食べ物と飲物があつたからであつた。一同充分にそれらを楽しみ、床についた。

翌朝早く、ブレデリは草原へと向かい、その日も多くの者を打ち負かした。日も暮れる頃、横柄な様子をした、特別身分が高いと思われる騎士がやって来て、彼に戦いを挑み、打ち負かされて、助命を求めた。

「ところで、あなたは何者なのですか？」

「宮廷の執筆を務めるものです。」と男が答えた。

「この娘さんの領地の、どの位の部分が、あなたの支配下にあるのです？」

「三分の一でございます。」と男が言った。

「この娘さんに、その三分の一の領土を、そのまま返すのです。そして今までにそこから得ていた利益の全てと、二百人分の食べ物と飲物、馬と武器を用意し、自分の身柄を人質として差し出すのです。」

そこで、命じられたようになされた。

三日目にペレドルは草原に出かけ、今までにもまして、沢山の者を打ち負かした。そして最後に、あの伯爵が向かってきて、ペレドルに戦いを挑み、彼に打ち負かされて、助命を求めた。

「ところで、あなたは何者なのですか？」とペレドルが尋ねた。

「身分を隠すつもりはありません。」と彼は言った。「私が、その伯爵です。」

「そうですか。それでは彼女の領地の全てと、あなたの領土、そして三

百人分の食べ物と飲物、馬と武器、そして自分の身を人質として差し出すのです。」

このようにして、ベレドルは三週間の間ここにとどまり、娘への贈り物と従順とを与え続けたのであった。領地内での娘の地位を取戻し、しっかりと固めてやった後で、

「お許しをいただいて、」とベレドルが言った。「そろそろ出発したいと思うのですが。」

「そうですか。お兄様、それで何が一番お望みですか。」

「ええ、確かに。あなたへの愛がなかったら、こんなにも長いこと、ここにどまりはいたしませんでした。」

「大切な友よ、」と彼女が言った。「一体あなたさまは、どんななのでしょう？」

「北の地方からやって来たエヴラウグの息子ベレドルです。なにか困ったことや危険が起こったら、わたしを呼びつけてください。出来ることなら何なりとお助けいたしましょう。」

それからベレドルは出発し、かなり遠くまで行ったところで、一人の婦人に会った。彼女は汗をかいた馬に乗っており、彼に挨拶した。

「どこからいらしたのですか、ご婦人よ。」とベレドルが尋ねた。

彼女は自分の置かれている苦境と、旅の目的とを語った。彼女は「空き地の誇り高き者」と呼ばれている男の妻であった。

「ああ、」とベレドルが言った。「私こそ、あなたに苦境をもたらす原因となった者なのです。そんな男には、その償いをさせねばなりませんよ。」すると、見よ、一人の騎士がやって来て、そんな騎士を見なかったかどうかと尋ねた。

「つべこべ尋ねるのはおやめなさい。私が、あなたの探している者なのです。誓って申しますが、あの方にはなんの咎もありません。」

二人は渡り合い、ベレドルはその騎士を打ち負かしてしまった。騎士は助命を願い出た。

「次のような条件で命を助けてあげましょう。戻って行って、あの娘にはなんの咎もないことが判明した、彼女の救済のために、この私があなたを打ち負かしたと話すのです。」

そこで、騎士はそうすることを誓ったのであった。

そしてベレドルは出発した。行く手にある山の上に、一つの城が見えた。城へやって来ると、槍の先のところで門を叩いた。すると、見よ、亜麻色の髪をした立派な若者が門を開けてくれた。出で立ちと様子は戦士そのものであったが、まだ年端のゆかない若者であった。ベレドルが広間へ入ってゆくと、大柄な美しい婦人が椅子に座り、沢山の侍女たちが彼女の回りを取り囲んでいた。その婦人が彼に挨拶し、歓迎した。食事の時間がくると、彼らは出かけて行った。食事が済むと、

「どこなりと、お殿様。」と婦人が言った。「あなたのお気に入りのところでお休みください。」

「ここで休んではいけませんか？」

「九人の魔女たちが、お殿様。」と彼女が言った。「ここにはいるのです。それに彼女たちの父と母もまた、一緒です。彼女たちは、カエル・ロイウ (Gaer Loyw) の魔女たちなのです。朝までに、私たちはほとんど全部殺されてしまおうでしょう。彼女たちが進入してきて、この家以外の全ての領地を荒らしてしまったのです。」

「そうですか。」とベレドルが言った。「今夜はここに休むことにしましょう。そして何か問題が起こったら、良いようにやってみてあげます。けれど、悪いようにはしませんよ。」こうして一同眠りについたのであった。明け方、ベレドルは叫び声を耳にし、急いでシャツとズボンを身に着け、短剣を首に回し、出て行った。行ってみると、一人の魔女が衝兵を襲い、彼らが悲鳴をあげていた。ベレドルは魔女に打ってかかり、短剣で彼女の頭を打ちつけ、その結果、彼女の兜とヘルメットが頭の上でお盆のようになり潰れてしまった。

「お慈悲を。エヴラウグの息子ベレドルよ。神の憐れみあらんことを！」

「一体どうして、老婆め。わたしがベレドルだということを知っているのだ？」

「あなたから苦しみられ、馬と武器とをとりあげられることは予言され、前もって知らされていたのです。私と暫くのあいだ一緒にいて、馬の乗り方や武器の扱い方を教えていただきます。」

「次のような条件で、慈悲を与えてやろう。この伯爵婦人の領地に、決して災害をおこしてはならぬぞ。」

ベレドルはこうして保証をとりつけ、伯爵婦人の許可を得て、魔女と共に「魔女たちの宮廷」へ出発した。ついにそこに、三週間滞在することになった。それから馬と武器とを選び、旅を続けた。

日も暮れんとしたとき、谷へ辿り着き、谷の最も奥まったところにある隠遁者の住処へやって来た。その隠遁者はベレドルを歓迎し、その晩そこに留まった。翌朝早く起き上がり、外へ出てゆくと、前の晩に雪が降っていた。住居の脇では、野性の雌の鷹があひるを襲い、馬の来る音を聞いて飛び立ち、からすが鳥の肉を狙って舞い降りて来た。ベレドルは側に立ち、からすの際立った黒、雪の純白、そして血潮の紅の色を、彼が最も愛する人の黒曜石のような黒い髪、雪のように白い肌に、そして純白の雪の中に落ちた血潮の真紅は、最愛の人の頬にさした二つの赤い点にたとえて、考えていたのであった。

一方、アーサーと随員たちは、ベレドルを探していた。

「誰か知っている者はいないか？」とアーサーが尋ねた。「上の谷に立っている、長い槍を持った男は何者なのだ？」

「殿。」と一人の者が言った。「私がいつて確かめて参りましょう。」

そこで彼はベレドルのいるところまでやって来て、そこで何をしているのか、そして一体何者であるのかと尋ねた。ベレドルは愛する女人のことで心が一杯で、一言も答えなかった。男は槍でベレドルを打った。ベレドルは男に向かうと、馬の鞍から地面へ叩き落としてしまった。次々と二十四人の騎士たちがやって来たが、ベレドルは彼らの友人にしたのと同様、一言も答えようとせず、それぞれに同じように振る舞うだけであった。すなわち、一撃で馬の鞍から地面へ叩き落としてしまったのである。するとケイがやって来て、無礼な横柄なやり方でベレドルに話しかけた。ベレドルは顎の下を槍で突き、彼を放り出してしまった。そのため彼の武器は壊れ、肩当ては破れ、彼の上に乗りかかって二十一回打ちつけた。ケイが死んだようになって意識を失っている間、それほど痛手は大きかったのだが、彼の馬は狂ったような駆け足で戻って行った。随員のそれぞれが、乗り手を放り出して馬が帰って来たのを見ると、戦いが行われたと思われる

ところへ、急いで出向いて行った。そこへやって来たとき、皆はケイは死んでしまったと思った。しかし皆はケイの骨を繋ぎ、顎に上手に包帯をすることができるような医者がいれば、大丈夫だろうとも考えた。ベレドルはケイの回りで起こっている緊迫した状況を見ていたにもかかわらず、いつも自分の夢想から覚める様子を見せなかった。ケイはアーサーのデントへ連れてこられ、アーサーは腕のよい医者たちを、ケイの元に呼び寄せた。アーサーは、ケイがこんなに傷ついたことを深く悲しんだ。彼をとっても愛していたからであった。

それから、グルッフメイが言った。

「誰とでも、立派な騎士が瞑想しているとき、無礼にもそれを邪魔することは許されはいけません。重大な損失をこうむられていたのかもしれないし、心のそこから愛しておられる御婦人のことを考えていらつしやるのかもしれない。そしてそのような非礼を行なってしまったのは、最後に行かれたお方も同じですよ。よろしかったら、殿。わたしが出向いていて、その騎士の瞑想が解けるかどうかやってみましょう。そう出来たら、穏やかに頼んで、あなたさまに会いにここへ来ていただきます。」

するとケイが、苦々しく嫉妬に満ちた言葉で言った。

「グルッフメイよ、あなたがあいつの手綱を引いて、ここに連れてこようとしていることは分かっているぞ。戦いに消耗した疲れた騎士を打ち負かしたとしても、そんなことは些細なこと、何の誉れにもなにもならないことだ。あなたの弁舌と心地好い言葉があれば、たとえ薄い衣をまとっていたただけだとしても、あなたにとってはそれで充分丈夫な鎧ともなろう。そんな状態にある騎士と戦うには、槍も剣もいらないうからな。」

すると、グルッフメイがケイに言った。

「そうしたいと思われるなら、もつとましな口の聞き方もできそうなものです。あなたの憤怒と侮辱をわたしに向けるとは、お門違いというもの。とにかくこの私が、鎧も肩も傷めることなく、あの騎士をここへ連れて参ります。」

するとアーサーがグルッフメイに言った。

「あなたはまるで、賢者や分別のある人のように話される。充分な武器

とよりすぐった馬を連れて、行っておいで。」

グアルッフメイは馬の装備を整え、ベレドルがいるところへ馬を急がせた。ベレドルは槍の柄にもたれ、相変わず同じ瞑想に耽っていた。グアルッフメイはなんらの敵意を示さず、彼に近づいて行った。

「私と同じく、あなたさえよろしいなら、お話がしたいのですが。それに私は、あなたにいらして会っていただきたいということをお伝えするための、アーサーの宮廷からの使者でもあります。私以前に二人の男たちがやって来たとは存じますが。」

「それは確かです。」とベレドルが言った。「まったく無礼なやりかたでやって来たのですよ。没頭している瞑想の邪魔をされたのも我慢なりませんが、戦いを挑まれたことも気に入っていませんでした。私は最も愛する御婦人のことを考えていたのです。そんな思いに捕らわれたのは、次の理由によるものなのです。私が雪とからず、そして雌の鷹が雪の中で殺したあひるから流れ出た血潮の跡を眺めていたときのことです。私の愛する方の白い体はあの雪のようだ、あの方の黒い髪と眉毛はまるであのからずのようだ、そして頬にさす紅はまるであの血潮のようだと思ひ始めたのです。」

「それはまた、なんとも優しい思いであられる。それを邪魔して、あなたの御不興をかったのも尤もなことです。」とグアルッフメイが言った。

「ケイがアーサーの宮廷にいるかどうか、教えて頂けませんか。」とベレドルが言った。

「おりますとも。」と彼が答えた。「あなたと戦った最後の騎士が、ケイだったのです。しかし、こうして出会われたことが、彼にはちっとも良いことにはなりませんでしたが。あなたの槍でこうむった一撃で、右の腕と肩の骨を傷めてしまいましたから。」

「そうですか。」とベレドルが言った。「こんなふうに、あの男女の小人に加えられた非礼の仇を取るようになるうとは、思いもかけなかったことなのですが。」

グアルッフメイは、彼があの男女の小人たちのことを語り始めるのを聞いて驚いた。そして近くへ寄り、彼を抱き、名前は何と言うのかと尋ねたのであった。

「エヴラウグの息子ベレドルと呼ばれている者です。」と彼が答えた。

「ところで、あなた、お名前は何とおっしゃるのです?」

「グアルッフメイと呼ばれている者です。」

「お目にかかれて嬉しく存じます。」とベレドルが言った。「どの地に行っても、あなたの武勇と誠実の名声を聞いていたからです。是非とも、あなたの友情をいただきたいものです。」

「確かに、それを差し上げましょう。そして私にもあなたの友情をいただきたい。」

「喜んで、差し上げますよ。」とベレドルが言った。

二人は心から喜び、親しくうち揃ってアーサーのところへやって来た。

彼らが来ると聞いて、ケイが言った。

「グアルッフメイがあの騎士と戦う必要がなかったのは分かっていましたよ。それによって名声を勝ち得ているのも、ちっとも不思議でないほどだからです。彼には、私たちが使った武器などではなく、あの上手い言葉だけで充分なのですよ。」

ベレドルとグアルッフメイは、グアルッフメイのテントへ入ってゆき、鎧を脱いだのだった。ベレドルはグアルッフメイと同じ様な衣装を身につけ、二人は手に手を携えてアーサーのところへ赴き、彼に挨拶した。

「ご覧下さい、殿。」とグアルッフメイが言った。「長いこと、お探しになっていた方でございます。」

「よくぞ参られた、そこなるお方。」と彼が言った。「どうぞここに滞在なさいますように。以前から、あなたのいらっしゃるのが分かっていたならば、あんなふうに出てゆかれることもなかったでしょうに。しかし、ケイが非礼を働いたあの男女の小人たちによって、あなたのいらっしゃることとは予告されていたのです。そして彼らの仇は、既にあなたによって取られたのです。」

そこへ王妃と侍女たちが入ってきた。ベレドルは彼女たちに挨拶し、彼女たちもまた挨拶を返し、彼の到来を歓迎した。アーサーもベレドルに大きな尊敬と榮譽を示し、彼らはカエル・スイオン (Caer Llŷon) へ戻って行った。

カエル・スイオンのアーサーの宮廷での最初の晩に、ベレドルはたまたま食事が済んだあとで、城の中をあちこち歩き回っていた。すると、見

よ、「黄金の手をしたアンガラッド」(Angharat Law Eurawc)が、そこで彼と出会うことになったのであった。

「確かに、御婦人よ。」とベレドルが言った。「あなたは、ほんとうにおやかで、麗しい方でいらしゃる。もしよろしかったら、あなたを最高の婦人として、私の意中の方にしたいのです。」

「誓って申し上げますが、」と彼女が言った。「永遠に、私があなたを愛することも、あなたのものであることもないと存じます。」

「私も誓って申します。」とベレドルが言った。「あなたが、あらゆる男たちの中で、私を一番愛して下さると告白してくれるまでは、私はどんなキリスト教徒とも、一口も話しはしないと誓います。」

翌朝、ベレドルは出発し、大きな山の高い尾根に添っての公道を進んだ。山の外れに丸い谷が見え、谷の境界には木々が茂り、ごつごつと尖っていて、谷の底には草原が広がり、草原と森の間には開墾された土地があった。森の中心のところには、荒っぽい造りの、大きな黒々とした家が並んでいるのが見えた。彼は馬から下りて、手綱を引いて森へと向かい、しばらく行くと切り立った岩の側面が見え、道はその岩の側面へと続き、そこには一頭の鎖に繋がれたライオンの姿があった。そのライオンの下の方には、恐ろしく大きな穴が開いているのが見え、その中には男や女や動物の骨が一面に散らばっていた。ベレドルは剣を抜いてライオンを打ち、その結果ライオンは鎖をつけたまま、真逆さまに穴の上にぶら下がった。二度目の打撃は鎖を打ち、それが壊れて、ライオンは穴へと落ちて行った。そこでベレドルは岩の側面を馬を引いて通り、谷へとやって来た。丁度谷の中央のところに、美しい城が見えたので、そちらへ歩みを進めた。城の側の草原には、大柄な灰色の髪の毛の男の姿があり(今までに見たどんな男よりも大きな者だったのだが)、二人の若者が象牙の柄のナイフを手にして、投げ合いをしていた。一人の若者は亜麻色の髪を、そしてもう一人は黄色い髪をした若者であった。ベレドルは灰色の髪の毛のところへやって来て、挨拶した。灰色の髪の毛の男は言った。

「わが門番の疑に恥あらんことを！」

そこでベレドルは、あのライオンが門番だったのだということに気がついた。それから灰色の髪の毛の男と若者は連れ立って城へ向かい、ベレドルも彼

らの後に続いた。そこは立派な格式のあるところだということが分かった。彼らが大広間へ進んでゆくと、既に食卓の用意がされており、食卓の上には、豊富な食べ物と飲物とが置いてあった。

やがて年とった女と若い娘とが、部屋から出てくるのが見えた。今までに見た中で、最も大柄な婦人たちだった。彼女たちは手を洗い、食事をするためにやって来たのであった。灰色の髪の毛の男が食卓の最上の席につき、年とった婦人がその側に座った。ベレドルと娘は一緒に座り、二人の若者が給仕をしてくれた。娘はベレドルを見て、悲しそうにするのであった。ベレドルは娘に、何故悲しそうな顔をするのかと尋ねた。

「友よ、初めてお目にかかったときから、男の方たちの中でも、私が一番愛するお方は、あなたさまだと思つたものです。あなたさまのような高貴なお方が、明日遭遇する運命を思つて、悲しくなるのです。森の中央のところにある、多くの黒い家をご覧になりましたか？　すべて、あそこに座っている灰色の髪をした私の父の臣下の家で、彼らは皆巨人なのです。明日、一斉にあなたを攻撃し、殺してしまうことでしょう。この森は、「丸い森」(Dyffryn Cwm)と呼ばれているところなのです。」

「それは残念なことです、美しい娘さん。私が今宵泊まる宿舎に、馬と武器があるかどうか確かめてくださいませんか？」

「そういたします。神様に誓って。できることなら、喜んでそういたします。」

皆は、これ以上騒ぐよりは眠つた方がよいと思われるころになると、寝所へ引き上げた。そして娘は、ベレドルの馬と武器が、彼の寝所にあることを確かめたのであった。翌朝、ベレドルは城の回りで、人々と馬たちの音が響きあうのを聞いた。ベレドルは起き上がり、自分の身と馬の装備を整え、草原へと向かった。年とった女と娘が、灰色の髪の毛のところへやって来た。

「お殿様。」と二人は言った。「あの騎士に、ここで見たことは一切話さないという誓いを立てさせて下さい。あの方はきつとお守りになると保証いたします。」

「誓って言うが、そうするつもりはない。」と灰色の髪の毛の男が言った。

ベレドルは軍勢と戦い、自らは傷を受けることなく、夕方までに、その三

分の一の者を殺してしまった。そこで、年とった婦人が言った。

「さあ、あの方はあなたさまの軍勢の三分の一を殺してしまいました。許しを与えて下さい。」

「誓って、そうするつもりはない。」と彼は答えた。

そこで年とった女と美しい娘とは、城の銃眼から戦いを見つめていた。ベレドルは黄色い髪 of 若者と戦いを交え、彼を殺してしまった。

「お殿様、あの騎士にお許しを。」と娘が言った。

「そうするつもりはない。神に誓って。」と灰色の髪の男が言った。

それからベレドルは亜麻色の髪の若者と戦い、彼を殺してしまった。

「二人の息子たちが殺されてしまう以前に、お慈悲を与えた方がずっとよかったです。今やお逃げようと思われても、ご自身でそうするのさえ難しくおなりです。」

「それでは、娘よ。出かけて行って、私たちにお慈悲をかけていただきたいと頼んでみてはもらえまいか。私たちの方ではそうはしなかったのだ。」

そこで娘はベレドルのいるところへやって来て、父親と命から逃げてきた彼の家来たちへ、慈悲をかけていただけないだろうか頼んだのであった。

「あなたの父上とその支配下にある人たちが、それぞれ臣下の礼づくしに皇帝アーサーのところへ行き、こうするのはベレドルの指示によるものであると告げることを条件に、そうして差し上げましょう。」

「神様に誓って、よろこんでそういたします。」

「それから洗礼を受けて下さい。そうしたらあなたをアーサーの宮廷へ送り、この谷を、あなたと子孫たちに永久に与えてほしいと頼んで差し上げます。」

一同は中に入り、灰色の髪の男と大柄な女性がベレドルに挨拶した。それから灰色の髪の男が言った。

「私がこの谷を支配下に置いて以来、命を失うことなくこの谷を出てゆくキリスト教徒は、あなたさま以外に見たことはありません。私たちは、アーサーへ臣下の礼を示しに出かけ、信頼と洗礼を受けることにいたします。」

するとベレドルが言った。

「私の方は、最も愛する御婦人との誓いを破らなかったことを神に感謝いたします。私は一言も、キリスト教徒と口をきかなかったのですから。」

そして彼らは、その晩そこに滞在したのであった。

翌朝早く、灰色の髪の男とそのお付きの者は、一緒にアーサーの宮廷へ向かった。彼らはアーサーに臣下の礼を示し、アーサーが彼らに洗礼を施した。そして灰色の髪の男は、自分を負かした者こそ、他でもないベレドルであることを話したのであった。アーサーは、その森を灰色の髪の男とその子孫たちに与え、ベレドルが命じたようにそこを治めるようにと言った。それからアーサーの許しを得て、灰色の髪の男は「丸い谷」へ向かって、出発して行った。

ベレドルは、朝早く自分の旅を開始し、一軒の家もない荒野の道を進んで行った。ついに小さな見すばらしい家へ辿り着いた。そこから七マイル四方にわたって、一軒の人家もないようなところで、金色の指輪の上に一匹の蛇が蠢いている音が聞こえてきた。蛇の気配がするところへ近づいてゆくと、激しく勇敢に、死にものぐるいに戦い、蛇を殺してその指輪を自分のものとした。このようにしてベレドルは、一人のキリスト教徒と口をきくこともなく、長い間彷徨を続け、やがてはアーサーの宮廷と愛する娘と仲間たちへの熱い思いで、顔色も風采もすっかりやつれはててしまった。

ベレドルは、アーサーの宮廷へゆく旅を続け、その道筋で、アーサーの衛兵たちに出くわした。ケイがその使者たちの先頭を切っていた。ベレドルの方には彼らのそれぞれが分かったが、衛兵は誰一人として、ベレドルのことを分かる者はいなかった。

「どこからお出でになったのだ、騎士よ。」とケイが尋ねた。二度、三度と尋ねても、一向に返答がなかった。ケイは槍で相手の太股の骨を貫き、何とかして口をきかせて、彼の誓いを破らせようとした。けれどベレドルは何一つ答えようとせず、通り過ぎていった。すると、グアルッフメイが言った、

「神に誓って、ケイよ。あのように口のきけない者に、そんな一撃を与えるとは、不憫なことをしたものだ。」

そして彼はアーサーの宮廷へ戻って行った。

「奥方さま。」と彼はグウェンヒヴァルへ言った。「口をきくことができないからといって、ケイがああ騎士に与えた一撃は、なんと痛ましいものでしょう。神のためにも、またこの私のためにも、どうぞあの方を受け入れて元のようにしてやって下さい。そのためのお返しは、何なりいたします。」

彼らが所用から戻ってくる前に、一人の騎士がアーサーの宮廷の側の草原にやって来て、戦いを求めた。戦いの相手が現われると、彼はその相手を倒し、それから毎日一人づつ倒していった。ある日のこと、アーサーと彼の衛兵たちが、教会へやって来た。皆は、そこで一人の騎士が、戦いの合図を掲げているのを見た。

「皆の者、実際のところ、馬と武器を持たずに、あそこにいる騎士と戦うわけにはいかないだろうよ。」

そこでお付きの者たちが、アーサーのために馬と武器を取りに行った。ペレドルは、お付きの者たちが側を通り過ぎてゆくのに出会い、その馬と武器を取って草原へと向かった。彼が立ち上がり、その騎士と対決するために出て行くのを見ると、人々は皆、丘のてっぺんや高いところに登って、二人の対決を眺めたのであった。ペレドルは騎士に手で合図して、向かってくるように言った。すると騎士が彼にかかってきた。しかしどんなに頑張っても、彼を一步も動かすことは出来なかった。それからペレドルが馬に拍車をあて、熱を込め、激しく誇り高く、鋭い気迫を込めて向かって行き、頸の下に悪意に満ちた苦い切っ先の強力な一撃を加えたので、騎士は馬の鞍から持ち上げられて、遠く先の方へと投げ飛ばされてしまった。それから彼は戻って来て、馬と武器を前と同じように、お供の者に返した。そして彼自身は、歩いて宮廷へと向かって行った。そのとき、ペレドルは「沈黙の騎士」(Mackwy Mut)と呼ばれていた。

すると見よ、「黄金の手のアンガラッド」が彼に会うためにやって来た。

「神様に誓って、お殿様。あなたのお世話になれないのは残念なことです。話すことさえできたならば、私はあなたさまを、だれよりもまして愛したでしょうに。けれど確かに、あなたが口をおききになれないとして

も、私はあなたを一番愛しています。」

「神があなたを恵んで下さいますように、御婦人よ。誓って、私もまたあなたを愛しているのです。」

それから彼がペレドルであることが分かったのであった。彼はグアルツフメイとウリエンの息子オウエインと、そこにいる一同との友情を深め、アーサーの宮廷に滞在することになった。

アーサーはカエル・スイオンにいて、狩りに出かけることになり、ペレドルも共に出かけて行った。ペレドルは鹿に自分の犬をけしかけ、犬は荒野で鹿を倒した。するとしばらく離れたところに、人の住んでいる住居が見え、一同そちらへ進んで行った。大広間が目に入り、広間の入口のところで、頭を刺った三人の浅黒い若者たちが、グイズブスをして遊んでいた。中へ入ってゆくと、身分の高い生まれを示す、高貴な衣装を身につけた三人の娘たちが、長椅子に座っていた。彼女たちと共に長椅子に腰掛けると、その中の一人の娘がしげしげとペレドルを見つめて泣き出した。そこでペレドルは、何故泣くのかと尋ねた。

「あなたさまのような立派な若者が、殺されてしまうかと思うと、悲しくなるからでございます。」

「誰が私を殺したりするのですか？」

「あなたさまがここに滞在することが、危険なことではなかったなら、お話しするのですが。」

「私の滞在がどんなに危険なものであっても、聞かせていただきたいものです。」

「私の父でもある者が、この宮廷を所有しております。そして許可なしにここへいらした方を、皆殺してしまうのです。」

「あなたのお父様とは一体どんなお方なのです？ そんなに誰でも殺してしまわれるなんて。」

「近隣の人たちに、策略と悪意をもった振る舞いをし、ちっとも憤いしようとはしないような者なのです。」

すると若者たちが立ち上がって、ゲーム盤の上の駒を片付けるのが見えた。大きな物音が聞こえてきたかと思うと、物音の後から、一つ目の大柄

な男が入って来るのが見えた。娘たちは立ち上がり、彼を出迎え、外着を脱がせてやった。彼は腰を下ろした。一息つき安らいだ後で、ペレドルの姿を見て尋ねた。

「この騎士は誰だ？」

「お父様。」と娘が答えた。「あなたが今までに会った中で、最も高く立派な方でございます。神様とあなたご自身の誇りにかけて、この方に親切にして差し上げて下さいませ。」

「おまえのために、この人を親切に扱い、今夜はその命も助けてやることにしよう。」

ペレドルは、暖炉の近くの彼らのところへ近づいて行って、共に食事と飲物を取り、娘たちと話をした。それからいささか銘酎して、この色の黒い男に言った。

「いかにも強そうにお見受けいたしますのに、一体誰があなたの目を取ってしまったのですか？」

「おまえがたった今聞いたような質問をした奴は、どんな贈り物や代価を支払っても、その命を維持するわけにはいかないことに、なっておるのだ。」

「お父様。」とその娘が言った。「あの方が銘酎してしまい、図に乗ってあなたさまに愚かな質問をしてしまったとしても、どうぞ私におっしゃったお言葉と、その約束とお守り下さいませ。」

「おまえに免じて、そうしよう。今夜は、喜んでそ奴の命を助けてやろうよ。」

皆はそんな風にして、その晩を過ごしたのであった。

朝になると、この黒い男は起き上がり鎧を身に着けると、ペレドルに言った。

「起きろ。やい。おまえに死んでもらうぞ。」と黒い男は言った。

ペレドルが、黒い男に答えて言った。

「私と戦おうと思うのなら、次の中から一つを選ぶがよろう。黒い男め。鎧を脱いで戦うのか、それとも私にも鎧を与えるかどちらかだ。」

「おやおや、鎧もなしに戦えるとも言うのかね？ 好きな鎧をとるがよろう。」

それからあの娘が、ペレドルの満足するような鎧を取り揃えてくれた。彼は黒い男との戦いを開始し、とうとう黒い男がペレドルに助命を求めてきた。

「黒い男よ、お前が自分は一体何者で、誰がお前の眼をくり抜いたのかを話したら、命は助けてやろう。」

「殿よ、申しましょう。私が戦った相手というのは「黒い蛆虫」(Punt Du)という奴なのです。「悲しみの小山」(Cruc Galar)と呼ばれる小山があり、その小山の中には塚があり、その塚の中には蛆虫がおるのです。その蛆虫の尻尾には石がついていて、その石の効能というのは次のようなものです。すなわち片手で金を望むと、もう一方の手にそれが持てるというものです。この蛆虫と戦って、私は目を失ってしまったのです。私の名前は、「黒い抑圧者」(Du Trahawc)と言います。というのも、何か悪戯をすることなしに、私の手元から人を手放してやったことはなく、誰に対しても、その埋め合わせをしようとは思わないような者だからです。」

「そうか。」とペレドルが言った。「あなたがいう小山というのは、ここからどの位離れたところにあるのだね？」

「ここからの距離を再調査して、あなたにお教えいたしましょう。ここから出発して一日で、「悩める王の息子たち」(Meibon y Brenhin y Dioddyneyn)と呼ばれる宮廷に到着すると思います。」

「何故そう呼ばれているのだね？」

「湖に住むアダンク (Addanc) という化け物が、毎日一人ずつ、息子たちを殺しているからなのです。そこへ着いたら、今度は「功績の婦人」(Ialtes y Kampen)の宮廷へ向かわれるはすです。」

「彼女のものだという功績とは、どういふものなのだね？」

「その方は三百人もの軍隊をもっているのです。宮廷に来る客人には誰にでも、彼女の軍隊の功績が語られるのです。そうするために、この婦人の傍らには三百人の軍隊が座っています。決して客人を侮蔑しているのではないのですが、手柄を語るためにそうしているのです。ここを出発して一日目に、あなたは「悲しみの小山」へ到着されることでしょう。その小山の周囲には、三百の大テントがあり、蛆虫を守っているのです。」

「長い間災いをなしていたからには、もうこれ以上、おまえがそう出来ないようにしてやろうよ。」

そしてペレドルは、彼を殺してしまったのであった。

すると、彼と最初に会話を交わした娘が言った。

「ここにいらつしやったときには、貧しくあられましたが、これから先は、あなたさまが殺したあの黒い男のために、豊かにおなりですよ。この宮廷には沢山の美しい娘たちがいることもお分かりのはずです。誰なりと、お気に召した娘を奥方に選ばれることもできましょう。」

「妻を得るために、御婦人よ、私の国からはるばるやって来たのではないのです。けれど多くの気持ちの良い若者が、この宮廷にすることも分かりました。それぞれお望みにしたがって、気に入られた方をお相手にお選びになられるのがよい。それに、私はあなたがたの財産の何一つも欲しくはありません。それらは私には必要ではないものだからです。」

それからペレドルは出発し、「悩める王の息子たち」の宮廷へとやって来た。見ると、そこにいるのは女性たちばかりであった。女たちは立ち上がり、彼を歓迎した。話を始めたとき、一頭の馬がこちらにやって来るのが見えた。鞍をつけており、その鞍の上に一体の屍が乗っていた。すると一人の婦人が立ち上がり、鞍から屍を取下ろし、ドアの下の方に置いてあった温かいお湯を入れた桶のなかで湯浴みさせ、貴重な塗り薬を塗ってやった。するとその男は生き返り、ペレドルのいるところへやって来ると、彼に歓迎の挨拶をしたのであった。それから二人の男たちが鞍に乗って入って来て、その婦人は初めの男にのと同じことをしてやった。それからペレドルは男に、何故そんなふうにするのかと尋ねた。すると彼らは、洞穴にアダックという化け物が出て、毎日彼らを一人ずつ殺しているのだと言った。一同はその夜、このようにして過ごしたのであった。

朝になると騎士たちは出発し、ペレドルは彼らの愛する婦人たちのために、自分も一緒に行つてよいかと尋ねた。彼らはペレドルの申し出を拒絶した。

「もしあなたが殺されたりしたら、あなたを再び生かしてくれるような人は、いないではありませんか。」

それから彼らは旅を続け、ペレドルが後に続いた。彼らの姿が消えて見え

なくなったとき、いままでに会った中で最も美しいと思われる婦人が、小山の頂上とところに座っているのが見えた。

「あなたさまの旅の目的は分かっております。」と彼女が言った。「アダックと戦おうとしておいでなのです。けれど力ではなく、彼の計らいのために、あなたは殺されてしまうでしょう。彼は洞窟におり、その入口に石の円柱があるので。彼の方には中に入つてこうして来る者は誰でも見えるのに、入って来る者には彼の姿が見えないのです。彼が円柱に隠れて打つ毒槍で、皆を殺しているのです。あらゆる女性の中では、私を一番愛してくださると誓って下さいましたら、中に入られたとき、彼を見るのが出来る石を差し上げましょう。彼の方では、あなたさまを見ることは出来ません。」

「誓つて、そういたします。」とペレドルが言った。「初めてお目にかかったときから、あなたをお慕ひしておりました。ところで、あなたをどこでお探しいたらいいのでしょうか？」

「わたしをお探しのときには、インドの方角を訪ねてきて下さい。」

ペレドルの手の中に石を残すと、この婦人の姿は消えてしまった。

やがてペレドルは、川の溪谷へとやって来た。谷の岸には森があり、川の両側には平坦な草原が広がっていた。川の片方の岸には白い羊の群れが見え、もう片方の岸には黒い羊の群れが見えた。すると白い羊の頭が鳴き声を上げ、黒い羊の頭が川を越えてやって来て、白くなった。やがて黒い羊の頭が鳴き声を上げ、白い羊の頭が川を越えてやって来て、黒くなった。

そして川の岸に、一本の樹があるのが見えた。その片一方の側は根元から梢の先まで燃えるような赤、もう一方の側には緑の葉がついていた。その樹の向こう側に、小山の上に座る一人の騎士の姿があった。口輪をはめ、綱に繋がれた白い胸の二頭のグレイハウンド犬が、彼の側に寝そべっていた。こんな王侯貴族の風格を持った男を、今まで見たことない程だった。彼の正面に広がる森の中から、鹿を追うための猟犬が、鹿の群れを追いつけているのが聞こえてきた。彼はこの騎士に挨拶した。すると騎士もペレドルに挨拶を返してきた。ペレドルはその小山から、三本の道が出ているのを見た。ペレドルは、この三本の道はそれぞれどこに通じているの

か尋ねてみた。

「これらの中の一本は、わたしの宮廷に続いているのです。次の中のどちらかをお選びになることを勧めます。真っ直ぐに私の妻がいる宮廷に行かれるか、さもなければここに留まって、あの猟犬たちが疲れ切った鹿たちを、この空き地へ狩り出してくるのを待っているかです。するとあなたは、今まで見た中で最も上等な猟犬、鹿に対して最も強力なあの犬たちが、鹿たちを近くの水辺で殺すのを見ることでしょう。食事の時間になったら、私の別当が馬を引き、あなたを今夜はそこで欲待いたします。」

「神のお恵みがあらんことを。しかし私は滞在するつもりはありません。旅を続けたいのです。」

「二番目の道は、近くの町へ続いています。そこでは食べ物や飲物を売っています。そして他のものよりずっと狭い道が、アダンクの洞穴へ通じる道なのです。」

「お許しただけるなら、騎士よ。私はそちらの方へ参りたいと存じます。」

ベレドルは洞穴へとやって来た。左手には石を、そして右手には槍を持っていた。中に入ると、アダンクの姿が見えた。彼はそれを槍で射し貫き、頭を切り取ってしまった。洞穴の入口を出てくると、見よ、彼の三人の仲間たちがそこにいた。彼らはベレドルに挨拶し、予言から、彼こそがこの災いを解決してくれる者であることが分かっていたと言った。ベレドルはアダンクの首をこの騎士たちに与え、彼らは三人の姉妹たちの一人を、ベレドルが妻として選ぶようにと申し出た。彼女と共にかれらの領地の半分を付けてやろうと言うのであった。

「私がここに来たのは、妻を得るためではないのです。」とベレドルは言った。

「けれど、私がもし妻をもちたいと思えば、最初に願うのはあなたたちの姉妹となることでしょう。」

ベレドルは旅を続けた。後ろで気配がして振り返ってみると、赤い馬に乗り、赤い鎧を身に着けた騎士がいるのが見えた。その男は彼と轡を並べるところまで来ると、神と人にかけて、彼に挨拶した。ベレドルもまた、丁寧に挨拶を返した。

「殿、わたしはお願いがあつて、あなたのところへ参つたのですが。」

「一体何を望みなのですか？」とベレドルが尋ねた。

「あなたの家来にしていたきたいのです。」

「家来にするとして、一体あなたはどなたなのですか？」

「あなたに身分を隠そうとは思いません。「赤い剣のエディリム」(Edy-ryn Gladys Coch)と呼ばれている者で、東方に領地をもつ伯爵です。」

「よりによって、自分自身の所領よりも、大きくもない領地を持つ男の家来になりたいなんて、全く驚くべきことですね。というのも、私は一つしか領地を持っていないからです。けれど家来になりたいとおっしゃるなら、喜んでそうして上げましょう。」

そして二人は、伯爵婦人の宮廷へやって来た。彼らは宮廷で歓迎され、軍隊の下の方に座るよう求められた。それはけっして彼らを蔑ろにしたためではなく、それがこの宮廷の慣習となっているからだと言明された。彼女の軍隊の三百人を、地面に投げ飛ばした者なら誰でも、彼女の傍らに座ることが許され、彼女はその人を誰よりも愛するようになるということであった。ベレドルが三百人の軍隊を地面に投げ飛ばし、彼女の側に座ると、その伯爵婦人は言った。

「あなたさまのような、勇敢で立派な若者を迎えることができて、神様に感謝いたします。けれど私は、最も愛するお方という人に、まだ出会っていないのです。」

「あなたが最も愛する人とは、一体誰なのですか？」

「誓いますが、「赤い剣のエディリム」が私の最も愛している方なのです。でもまだお目にかかったこともないのです。」

「確かに。」とベレドルが言った。「エディリムは私の仲間で、ここにおりますよ。彼のために、私があなたの軍隊と戦いに参上したのです。そう望んだら、彼の方が私よりずっと上手く戦えます。彼をあなたの手に委ねましょう。」

「神に感謝いたします。立派な騎士のお方。その方を最も愛する人といえますわ。」

そしてその晩、エディリムと伯爵婦人は床を共にしたのであった。

朝になるとベレドルは、「悲しみの小山」目指して出発した。

「あなたのお側に、殿よ。私もお供いたします。」とエディリムは言った。彼らは、小山と大テントの立ち並んでいるのが見えるところまでやって来た。

「さあ行つて、」とベレドルがエディリムに言った。「あそこにいる人たちに、私に臣下の礼をつくすように言うのです。」

エディリムは出かけて行つて、ベレドルに言われたように告げた。

「さあ来て、私のご主人に臣下の礼をつくすのだ。」

「あなたのご主人とは誰なのだ？」と彼らは尋ねた。

「長い槍のベレドル」が私のご主人様だ。」

「使者を殺すことが許されてさえいれば、おまえはとても生きてご主人のもとへ戻れなかつたらうよ。王や伯爵や男爵に向かって、自分の主人のところへ来て、臣下の礼をつくせなどと要請するなんて。」

エディリムはベレドルのところへ戻つて来た。ベレドルは彼らのところへ行つて、臣下の礼をつくすか、さもなければ彼と戦うか、いずれか一つを選べと言うように命じた。彼らは戦うことを選んだ。ベレドルは、その日は百のテントの持ち主を地面に投げ飛ばした。次の朝には、べつの百のテントの持ち主を地面に投げ飛ばした。三百目のテントの持ち主たちは、ベレドルに臣下の礼をつくすことに決めた。ベレドルは彼らがそこで何をしているのかと尋ねた。彼らは蛆虫が死んでしまうまで、番をしているのだと答えた。

「それからその石を、戦いで手に入れようと思つているのです。われらの中で最も優れた者がその石を獲得することでしょう。」

「そこで待つていなさい。」とベレドルが言った。「私が蛆虫と戦つて来よう。」

「いいえ、そうはできません、殿よ。」と彼らが言った。「私たちも一緒に、蛆虫と戦わせて下さい。」

「おやおや、」とベレドルが言った。「そのようにはさせませんよ。蛆虫は当然殺されることになりましたが、あなたたちの誰の榮譽にしようとは思いません。」

彼は蛆虫のいるところへ出かけて行き、それを殺して、彼らのところへ戻つて来た。

「あなたがたもここにやつて来たのですから、その費用を請求なさい。金で払いましょう。」とベレドルは言った。そしてそれぞれが要求するだけの金を支払つてやつた。彼の側からの要求といつたら、ただ臣下の礼をつくさせることだけであつた。それからエディリムに言った。

「あなたは最も愛する御婦人のところへ、お戻りなさい。私は旅を続けます。家来になつてくれたことに對しては、何かお返ししようと思ひます。」

それから彼は、その石をエディリムに与えたのであつた。

「神がお恵みくださらんことを。そしてあなたの足を早めたまえ。」

そしてベレドルは出発して行つた。

彼は川の溪谷へやつて来た。そこには今までに見た中でも最も美しく、色とりどりの沢山のテントが見えた。そしてもっと驚くことには、そこには見渡すかぎりの沢山の風車や水車があつたことであつた。ベレドルはそこで、亜麻色の髪の大柄な男と出会つた。彼は職人のような様子をしてゐた。ベレドルは、男の名前を尋ねた。

「あそこにある、全ての水車や風車を統括する粉屋の長をしている者です。」

「あなたのところで、泊めていただけますか？」とベレドルが尋ねた。

「ああ結構ですとも。」と彼は言つた。「喜んで、そういたしましょう。」

彼は粉屋の家へやつて来た。そこは気持ちのよい、立派な住処であつた。そこでベレドルは、自分自身とこの家の人々の食べ物と飲物を買うための、お金を貸してくれないかと頼んでみた。ここから出て行くときには、返すからと言つた。彼は粉屋に、こんな大集合の訳を尋ねた。粉屋はベレドルに言つた。

「二つの中のどちらかですね。あなたは遠くからいらしたお方か、それとも愚か者かですよ。ここには大コンスタンティノープル (Christinobyn) の女帝がいらつしやるのです。最高に勇敢な人を求める他は、なに必要としないような方なのです。富などいらなからいますから。ここにいる何千の人々のための食料などは運べるわけもなく、そのためにこんなにも沢山の風車や水車があるのですよ。」

その晩、彼らは休息した。

朝になるとベレドルは起き上がり、自分と馬の身支度を整え、トーナメント試合へと出かけて行った。すると他のテントの中に、今まで見たこともないような立派なテントがあるのが目に入った。テントの窓から、一人の美しい娘が首を出していた。こんなに美しい娘は見たことがないと思われる程で、金の錦織の衣装を着ていた。その娘を一心に見つめるうちに、彼女への恋の思いが彼の心の中に入り込んで来た。このようにして、彼は朝から昼まで、そして昼から夕方に至るまで、この娘を見つめ続けていた。やがてトーナメント試合も終わり、彼は宿へと戻って来た。鎧を脱ぎ、粉屋に借金を申し出た。粉屋の女房はベレドルに腹を立てていた。それにもかかわらず、粉屋はベレドルに金を貸してやることにした。朝になるとベレドルは前の日と同じように振る舞うのだった。その晩宿へ戻って来て、粉屋から金を借りた。三日目、彼がいつものところで娘を見つめていると、斧の柄の部分で加えられた激しい一撃が、肩と首の間に浴びせられるのを感じた。後ろを振り返ると、粉屋がいるのが見えた。

「次の二つの中から、一つを選んでください。」と彼が言った。

「頭を別の方に向けて方向転換するか、もしくはトーナメント試合に行ってみるかです。」

するとベレドルは、粉屋にっこりと微笑み、トーナメント試合へと出かけて行った。それから彼はその日出くわした全ての人を、地面へ投げ飛ばした。沢山の者を投げ飛ばしては、贈り物としてその男を女帝に献上し、馬と鎧一式の方は、贈り物として粉屋のおかみさんへ、お金を融通してもらったお返しとして差し出したのであった。ベレドルは全ての人々を、地面に投げ飛ばしてしまふまで、トーナメント試合を続けた。地面に投げた人々については、人間は女帝の牢屋へ、そして馬と鎧一式は、お金を融通してもらった感謝を込めて、粉屋のおかみさんへと贈られた。

やがて女帝は、この「粉屋の騎士」へ使者を送り、やって来て自分に面会するようにと命じたのであった。最初の使者は無視され、二番目の使者が送られて来た。三度目には百人の騎士が送られて、彼に来て面会するようにと告げた。もし彼が自らの意思で来ないとしたら、無理やりにでも連れてくるようにと言われていた。彼らはやって来て、女帝のメッセージを伝えた。彼は使者たちをいたぶってやった。すなわち彼らをノロジカのよ

うに縛りあげ、粉屋の淵へ投げ入れてしまったのであった。そこで女帝は、彼女の相談役をつとめる賢者を呼び寄せた。彼は女帝に言った。

「私がお使いとして、彼のところへ参りましょう。」

彼はベレドルのところへやって来て、挨拶した。そして愛する婦人のために、行って女帝に面会してくるようと言った。そこでベレドルは、粉屋と連れ立ってやって来た。テントの中の一室の上座へと行き、そこに座った。女帝が傍らに座り、二人の間には短い会話が交わされた。やがてベレドルはいとまを告げ、彼の宿舎へと向かったのであった。

朝になると、彼は女帝に会いに出かけて行った。大テントへやって来ると、いづこも甲乙つけがたいところで、どこにベレドルを座らせたらよいか戸惑うほどであった。ベレドルは女帝の傍らに座り、丁寧に話をした。彼らがそのようにして過ごしていると、ワインを満たした金色の杯を手に持った浅黒い男が入って来るのが見えた。彼は女帝の前にひざまずき、この杯を彼女のために自分と戦う男にだけ与えるようにと頼んだ。すると彼女は、ベレドルの方を見たのであった。

「ご婦人よ、」と彼は言った。「その杯を私にいただきたいのです。」

それから彼はワインを飲み干し、杯を粉屋の女房に与えた。そのようにしていると、見よ、以前の男よりもずっと大柄な一人の浅黒い男が、獣の爪のかたちをした、ワインの一杯に入っている杯を手持って入って来るのが見えた。彼はそれを女帝に渡し、自分と戦う者以外に、それを与えてくれるなと頼んだ。

「ご婦人よ、」とベレドルは言った。「それを私にいただきたい。」

そしてワインを飲み干し、杯を粉屋の女房に与えたのであった。彼らがそのようにしていると、見よ、前の二人の男たちよりもずっと大柄な赤い巻毛の男が、ワインを満たした水晶の杯を手にしてやって来るのが見えた。

彼はひざまずき、その杯を女帝の手に渡し、彼女のために自分と戦う男以外に、それを与えてくれるなと頼んだ。すると彼女はそれをベレドルに与え、彼はそれを粉屋の女房へ贈ったのだった。その晩ベレドルは自分の宿舎へ戻って行った。翌朝、彼は自分と馬の身支度を整え、草原へ出かけて行った。そしてベレドルは三人の男たちを殺し、大テントへ戻って来たのであった。すると女帝が彼に言った。

「素晴らしいベレドルさま。あなたさまがアダंकを殺し、私がこの石をあなたに差し上げた際、私になさった約束を思い出して下さいませ。」

「御婦人よ。」と彼が言った。「全くそのとおりです。それを覚えておりますよ。」

そして物語が伝えるところによると、ベレドルは女帝と共に、その後十四年間支配したということである。

アーサーは彼の主な宮廷の一つ、カエル・スイオン・オン・ウスクに滞在していた。大広間の中央の床に敷かれた錦織の絹のマントの上に、四人の男たちが座っていた。ウリエンの息子オウエイン、ディアルの息子ダアルッフメイ、エミール・サダウの息子ハウエル、(Howel nab Enyr Ijydaw) そして「長槍のベレドル」(Peredur Baladur Hir) であった。彼らは、手にラバを駆るこつこつした皮ひもの管を持ち、黄色いラバに乗った、黒い巻毛の醜い娘がやって来るのを見た。彼女の顔と腕は、タールに浸したどんな鉄よりも黒かった。しかしその姿勢と比べれば、そんな色は問題にならないほどの醜さだった。高い頬骨、肉の垂れ下がった顔、広い鼻の穴がまるで切り株についているような鼻、片方の目は斑な緑色で、まるで突き刺すように鋭く、もう一方の目は黒曜石のように黒く、顔の中に深く沈んでいた。長い黄色い歯はエニシダの花の黄色より黄ばみ、彼女の腹は胸よりも高く、顎のあたりまで膨れ上がっていた。彼女の背骨はかいばおけのように曲がり、両腰は幅広の骨で、そこから下は全ての部分で細くなっており、例外と言ったら両足と膝くらいのものであった。彼女はアーサーとベレドルを除いた、他の人々に挨拶した。そしてベレドルに向かって、怒りに満ちた汚い言葉で話しかけたのであった。

「ベレドルよ、あなたには挨拶はしない。そんな価値はないからだ。あの方がお前に与えた好意と幸運を無視するなんて。『びっこの王』(Brenhin Clott) の宮廷に来たとき、そしてそこで鋭い切っ先の槍を持った騎士を目にし、その槍の先から血の一滴が流れ出し、それが騎士の手首のところまで糸を成して流れるのを目撃したり、その他にも多くの不思議をそこで見ていながら、その意味するところも、原因も尋ねることもしないなんて。もしそれを尋ねていたなら、あの王は健康を取戻し、彼の王国にも平

和が訪れただろうに。けれどあれ以来、戦いが続き、騎士たちはいなくなり、女たちは未亡人となり、娘たちには後見人もなくなってしまうのだ。みんなお前のためなんだよ。」

そして彼女はアーサーに言った。

「お許しをいただければ、殿。私の宿舎はここから遠く離れた『誇りの城』(Castell Sybaw) というところにあるのです。その名を聞かれたことがあるかどうかは分かりませんが、そこには五百六十六人の正式な騎士たちがいて、彼らを最も愛する女たちが一緒におります。武器や槍試合や戦いで名声を得たいと願うものは誰でも、それに値さえすれば得ることができます。特別優れた名声と榮譽を望む方々も、それらを得られることでしょう。高い山の上には城が立っていて、その中に一人の娘が閉じ込められており、そこを開放してくれる方が、この世で最高の名誉を獲得するのです。」

それから、彼女は出発して行った。

ダアルッフメイが言った。

「本当に。私とその娘を開放してやれるかどうかやってみるまでは、とても心安らかに眠ってはいられません。」

そしてアーサーの宮廷にいる多くの者が、彼と同じ思いを抱いていた。しかしベレドルは、それとは異なる発言をしたのであった。

「全くのところ。あの黒い娘が語った話とあの槍の意味とを理解するまでは、とても心安らかに眠ってはいられませんよ。」

皆が準備をしていると、一人の騎士が門のところへやって来るのが見えた。戦士のように大きく力がありそうで、馬と武器を携えており、ダアルッフメイを除くアーサーと一同の者に挨拶した。騎士の肩には、金の打ち出し模様を施された楯が掛けられており、それには紺碧の青の縞が付いていて、鎧もそれと同じ色であった。彼はダアルッフメイに言った。

「あなたは、策略と裏切りとを使って、私の主人を殺してしまわれた。そのことを証明してみせましょう。」

ダアルッフメイは立ち上がった。

「これがこそが、」と彼が言った。「ここであらうと、またいずこなりともお好きところで、あなたの挑戦を受けるといしるしの手袋だ。私は

裏切り者でも反逆者でもないのだから。」

「私より位の高い王の面前で、あなたの挑戦をお受けいたしましたよう。」

「望むところだ、」とグアルッフメイは言った。「お好きなところへ行かれよ。お供いたそう。」

騎士は出て行き、グアルッフメイは準備をした。数々の鎧一式が提供されたが、彼は自分のもの以外、取ろうとはしなかった。グアルッフメイとベレドルは身支度を整え、彼の後を追った。友情とお互いに対する愛情で結ばれていたからであった。しかし二人一緒の道を行くことはなく、それぞれの道を進んで行った。

グアルッフメイはまだ日も浅い頃、谷へと到着した。谷の中に一つの城壁が見え、城壁の中には大きな宮廷があり、その回りを堂々たる高い塔が囲んでいた。一人の騎士が、堂々と歩調も崩さず、軽やかな足取りで歩みを進め、輝くばかりの黒い色をした鼻の穴の広い軍馬に乗って、門から出て来るのが見えた。彼こそが、この宮廷を所有している男であった。グアルッフメイは男に挨拶した。

「神の恵みが、あなたにあらんことを。騎士よ、どこからいらっしゃったのです？」

「私は、」と彼は答えた。「アーサーの宮廷から参ったのです。」

「アーサーの御家来ですか？」

「はい、たしかに。」とグアルッフメイが言った。

「あなたにお勧めしますが、」とその騎士が言った。「あなたは疲れ、消耗してられるようにお見受けいたします。宮廷へ行らっしゃい。よろしかったら、そこにお泊めいたしましょう。」

「そう願えれば助かります、御主人。あなたさまに神の御加護があらんことを。」

「この指輪を取って、門番へのしるしとなさい。向こうの塔の方へ行くのです。そこに、私の妹がおりますから。」

グアルッフメイは門のところへやって来て、指輪を見せ、塔の方へと歩みを進めた。塔へやって来ると、大きなあかあかとした火が燃えており、きらきらとした煙の立たない炎が高く舞い上がっていた。その火の側の椅子に、美しく堂々とした風格のある娘が座っていた。娘は彼の姿を目にす

ると喜んで歓迎し、椅子から立ち上がって出迎えた。彼は娘の傍らに座った。食事を共にし、その後で楽しい語らいを持った。このようにして過ごしていると、見よ、立派な白髪の男が入って来て、彼らの居るところまでやって来た。

「嘆かわしいことだ、性悪女め。」と彼が言った。「こんな男と座を共にしたり戯れたりするのが、あなたに相応しいこととお思いか？ 席を同じゅうすることも、戯れることも絶対にしてはならぬのだ。」

彼は顔を背けると出て行ってしまった。

「長であられる方、」娘が言った。「私の忠告に耳を貸していただけますなら、あの人が何か策を弄するといけませんから、戸びらをしっかりと閉めておいて下さいませ。」

グアルッフメイは立ち上がって戸びらのところへ行くと、六十歳位の、しっかりと鎧を纏った男が、塔へ登って来るのが見えた。グアルッフメイは、狩りから戻るまでは誰も登って来られないように、グイズブスの盤で防御した。

すると、見よ、伯爵がやって来た。

「一体どうしたというのだ？」と彼が言った。

「見苦しいことです。」と白髪の男が答えた。「あの性悪女が、あなたのお父上を殺した男と、夕方までずっと共に座ったり、お酒を飲んだりしているのですよ。奴は、グイアルの息子グアルッフメイです。」

「もう行ってよいぞ。」と伯爵が言った。「私が中に入ってみよう。」

伯爵はグアルッフメイを歓迎した。

「長である方、」と彼が言った。「御自分が、私たちの父を殺したということを知っておられたとしたら、こうして私たちの宮廷へ行らっしゃったのは、間違いいいものですよ。たとえ私たちが仇をとらないとしても、神が報復してくださいませでしょうから。」

「友よ、」とグアルッフメイが言った。「そのことに関しては、こういう訳なのです。私が参ったのは、そのことを告白するためでも、否定するためでもないのです。私はただ、アーサーと私自身のための探究の旅を続けているところなのです。けれども誓って申しますが、探究の旅から一年の休息をいただいた後で、又この宮廷へやって来て、つぎの二つのうちの

つをいたしました。すなわちそれを否定するか、認めるかということですよ。」

猶予は喜んで与えられた。そこで彼はその晩、そこで過ごした。翌朝、彼は出発して行った。しかしその後のグアルッフメイのことを語る物語は、何も残っていない。

ペレドルは自分の道を歩んで行った。黒い娘の情報を求めて島中を放浪したが、何一つ手掛かりとなるものは得られなかった。それから、川の溪谷にある知らない土地へやって来た。谷を渡っていると、司祭の印をつけた一人の乗り手が、こちらへやって来るのが見えた。ペレドルは祝福を与えて欲しいと頼んだ。

「残念にも、哀れなお方。」と彼が言った。「あなたには、祝福を受ける資格はありません。このような良き日に、鎧を身に纏っておいになるとは。そんなお方にとっては、祝福など何のお役にもたしますまい。」

「今日はどのような日のですか？」とペレドルが尋ねた。

「聖金曜日ですよ。」

「私をとがめないで下さい。知らなかったのです。もう一年も前に故郷を出てきているのですから。」

ペレドルは馬を下り、手綱を引いて歩んだ。脇道が出てくるまで公道を旅し、それから後は脇道をたどって森を抜けて行った。森の外れに塔のない城が立っているのが見え、人の住んでいる気配がしていた。城へとやって来ると、城門のところで、先刻出会ったあの司祭に出くわした。そしてペレドルは祝福を与えてくれるようにと頼んだ。

「神の祝福があなたにあらんことを。」と彼は言った。「こんなふうに旅をする方が、あなたにはずっと似合っています。今夜は私と御一緒にして下さい。」

そこでペレドルはその晩、そこに滞在した。

翌朝ペレドルは、出発の許可を願ひ出た。

「今日はどんな旅にも相応しい日ではありません。今日、明日、そして明後日と、私と一緒にいてください。そうすれば、私があなたの求めておられることについての、最高の案内をして差し上げます。」

そこで第四日目、ペレドルは出発の許可を願ひ出て、司祭に「不思議の

城」(Caer yr Emrynedeu)についての案内を頼んだのであった。

「私の知っているかぎりお教えいたしましょう。向こうの山を越えるのです。するとその山の向こうには、遠くに川が流れ、その川の溪谷に王の宮廷があります。イースターの季節には王がそこにおられます。あなたがその「不思議の城」の在処を知りたいと思ったら、そこで分かるはずですよ。」

それから自分の道を歩み、川の溪谷へとやって来て、狩りに出てゆく男たちと出会い、その中に位の高い男がいるのを見た。ペレドルは彼に挨拶した。

「選んでください、族長。宮廷へ行かれるか、さもなければ私と一緒に狩りに行かれるかです。あなたと共に一人の家来をつけてやり、そこにいる私の娘に、私が狩りから帰るまで、食事やお酒のお相手を致させます。あなたの所用と言うのが、そこで供される物で間に合うようなら、喜んでそれをお取り下さい。」

そして王は、黄色い髪の若者を、彼につけてやったのであった。二人が宮廷へやって来ると、婦人が立ち上がり、手を洗って身支度を整えた。ペレドルは前に進み出ると、彼女は嬉しそうに彼に挨拶し、自分の傍らに席を用意してくれた。そして食事をとった。ペレドルが何か言うのと、彼女が高らかに笑うので、宮廷の皆の耳に入ることとなった。すると短い黄色い髪をした若者が、彼女に言った。

「まったくのところ、あなたが自分の恋人を持つとうと思われるなら、この方こそふさわしい。もし恋人をお持ちでなかったら、この方にそのお心とお気持ちをかけなさい。」

それからこの短い黄色い髪の若者は王を追いかけ、彼が会ったこの男こそ、王の娘の恋人に相応しいと思うと告げた。

「もし、彼女の恋人に相応しくなかったとしたら、あなたがさが防がないかぎり、すぐにでも彼女の恋人になってしまいう気配ですよ。」

「して、あなたの助言とはどんなものだね、若者よ。」

「屈強の者を差し向けて、ことがはっきりするまで、彼を捕らえておいたら如何かと存じます。」

そこで王は家来たちを遣わしてペレドルを捕らえ、牢に監禁した。すると

娘が父に会いに来て、何故アーサーの宮廷からやって来た人を牢に入れたのかと尋ねるのであった。

「たしかに。あの人を今夜、明日、そして明後日も自由にはしないし、やって来たところに帰してもやらないつもりだ。」

彼女は王の言葉に異議を唱えるのでもなく、騎士のところへ戻ってきた。

「ここにいらっしゃるのは、退屈ですか？」

「そうではないから、あまり気にしてはいないのです。」

「あなたの寝台も待遇も、王のそれよりも決して劣ってはいないはずで。御命令があれば、この宮廷の最高の歌もあなたの望むがままです。あなたとお話するために、私の寝台をここに持ってきた方がよろしければ、喜んでそうもいたしましょう。」

「それに反対はいたしませんよ。」

その晩、彼は牢獄にいた。そして娘は、彼に約束した通りにしたのであった。

翌朝ベレドルは、町に騒ぎの音が起るのを耳にした。

「ああ、美しい娘さん、あれは何の騒ぎですか？」

「王の軍隊が今日この町にやって来ているのです。」

「それは何のためなのですか？」

「この近くに一人の貴族がいて、二つの所領を持っています。その方は、王と同じくらい力のある者なのです。今日両者の間で戦いが行われようとしているのです。」

「お願いがあるのですが。」とベレドルが言った。「私に馬と武器を取ってきて、その戦いを見に行かせて下さいませんか。誓って牢へ戻りますから。」

「喜んで。」と彼女は言った。「あなたのために、馬と武器とを持ってまいります。」

それから彼女は馬と武器を用意し、彼の鎧の上に真紅の外衣をかけ、肩には黄色い楯をかけてやった。彼は戦いへ出向き、その日会った伯爵の家来たちを全て地面に投げ飛ばした。それから牢屋へと戻ったのであった。彼女はベレドルに様子を聞こうとした。しかし彼は一言も彼女に話そうとはしなかった。そこで彼女は父から様子を聞き出しに行き、誰が王の後に続

いて、一番目ざましく戦ったのかと尋ねた。するとその男が誰であるかは分からないのだと答えた。その男は鎧の上に赤い外衣をつけ、肩に黄色い楯をつけていたと言った。そこで彼女はにっこりと微笑み、ベレドルのところへ帰ってきた。その晩、彼への関心は一層高まった。

三日間が終わる迄に、ベレドルは伯爵の家来たちを殺し、自分の正体を知られることなく、牢屋へ戻って来た。そして四日目に、伯爵その人をも殺してしまつた。娘は父親のところに行き、様子を聞こうとした。

「良い報せだ。」と王は言った。「あの伯爵は殺され、」と彼は続けた。

「二つの領地が今や私のものになったのだ。」

「お父様、誰が伯爵を討ったのかお分かりますか？」

「分かっておる。」と王が言った。「赤い外衣と黄色い楯の男が、奴を倒したのだ。」

「お父様、」と彼女は言った。「私はその方を知っております。」

「神賭けて、」彼が言った。「一体誰なのだ？」

「お父様、その方は、あなたが牢に入れておられる人なのです。」

それから王は、ベレドルのいるところへやって来て挨拶し、彼の望むがままに何なりと、やり遂げた仕事に対するお返しがしたいと申し出た。一同が食卓につくと、ベレドルは王の傍らに席を占め、彼のもう一方の側には娘が座った。食事が済むと、王がベレドルに言った。

「私の娘を、妻としてあなたに差し上げましょう。彼女には私の領地の半分をつけてやります。それに二つの伯爵領を、贈り物としてあなたに進呈いたします。」

「神が報いてくれることを。しかし私はここに、妻を迎えにきたのではないのです。」

「それでは、何がお望みなのです、族長よ。」

「私の欲しいのは、「不思議の城」の情報なのです。」

「この方のお考えは、私たちが思っていたより、ずっと高邁なものでいらっしゃるようです。」と娘が言った。「その城についての情報を差し上げましょう。そして父の所領内を旅するときの案内人と、充分な食料も用意いたします。あなたさまは、私の最も愛するお方ですもの。」

そして彼女は言った。「あそこにある山をお越えなさいまし。すると一つ

の湖が見えるでしょう。その湖の中に城があり、「不思議の城」と呼ばれているのです。ただそう呼ばれているというだけで、私たちにはその不思議とやらが、何であるかは分かりませんが。」

ペレドルが城へ近づいて行くと、城の扉は開いていた。大広間へやって来ると、そのドアも開いていた。中へ入ると、広間にはグイズブスがあり、二組の駒がそれぞれを相手に戦っていた。彼が肩入れをしていた組が負けると、相手の組がまるで人間のように歓喜の叫び声を上げた。彼は怒り、駒を自分の膝の上に集め、盤を湖の中に投げ入れてしまった。

こんなふうに行っていると、見よ、あの黒い娘が入って来て、ペレドルに言った。

「神はあなたの来たことを歓迎なさるまい。あなたは良いことにもまして、しばしば災いをなさるのだから。」

「何で私を非難しておられるのか。黒い娘よ？」とペレドルが尋ねた。

「あなたは、女帝の盤を無くしてしまわれた。そんなことを彼女は、帝国のために望んではいなかったのに。」

「それでは何か、それを取り戻す方法があるだろうか？」

「ある。それはあなたが、イスビディノンギル (Ysbidinongyl) の城へ行くことだ。そこには、女帝の領地を荒らしている黒い男がいる。奴を殺すのだ。そうすれば盤は取り戻せる。しかし、そこへ行ってしまったら二度と再び生きては戻ってこれないだろうがね。」

「そこまでの案内をしてはくれまいか？」とペレドルは聞いた。

「行く道は教えてやろうよ。」と彼女は言った。

彼はイスビディノンギルの城へ行き、黒い男と戦った。黒い男はペレドルに助命を願った。

「命は助けてやろう。あの盤を私がやって来たときあったところへと戻すのだ。」

すると、黒い娘がやって来て言った。

「神があなたを呪われるがよい。女帝の領地を荒らしている男を生かしたままにしておくなんて。」

「彼の命は取らなかったのだ。」とペレドルが言った。「それもあの盤を取り戻したかったからなのだが。」

「あの盤は、あなたがそれを、最初に見つけてところには置かれてはいない。戻って、奴を殺しておしまい。」

ペレドルは戻って行き、黒い男を殺した。彼が宮廷に帰ってくると、黒い娘がそこにいた。

「娘よ、」と彼は言った。「女帝はどこにおられるのだ？」

「神に誓って。あなたが向こうの森にいる災いを殺してしまわないかぎり、あの方には会えまいよ。」

「それはどんな災いののだ？」

「そこに一頭の雄鹿がいるのだ。最も早く飛ぶ鳥よりも駿足、額には一本の角を持っていて、その角は槍の柄よりも長く、最も尖らせた槍先よりも尖っている。それは木の梢や牧草を食い散らしてしまう。そこで見つけたあらゆる動物を殺してしまう。殺さなくとも、飢えのために死なせてしまふのだ。それより困ったことは、毎晩魚の住む池にやって来て、水を飲み干してしまふので、魚は干上がってしまい、再び水が満たされる前に死んでしまうことなのだ。」

「娘よ、」とペレドルが言った。「一緒に来て、その動物を私に見せてもらいたいものだ。」

「いいやだめだね。この一年間というものの、どんな生き物もあえて森には近づかないようにしているのだ。しかしここに女帝の愛玩用の犬がいる。こ奴が鹿を駆り立てて、あなたのところへ連れて来てくれるだろう。」

そして鹿は全速力であなたに向かってくることだろうよ。」

小犬がペレドルの案内に立ち、鹿を追い立てて、ペレドルのいるところまで連れてきた。すると鹿はペレドルに向かって突進してきたが、彼はその突撃をかわし、剣で頭を打ち落とした。鹿の頭をしげしげと眺めていると、馬に乗った婦人が彼の方にやって来るのが見えた。そして小犬をケーブの袖に、またその頭を彼女と鞍頭の間に取上げると、鹿の首の回りには赤い金のカラーが巻かれていた。

「族長よ。」と彼女は言った。「あなたは何と不法なことをなさったのでしょう。私の領地の中でも、最も美しい宝石を殺しておしまいになられるとは。」

「そうするように、求められたのですよ。けれど、何かあなたの友情を

取り戻す手段があるでしょうか？」

「ごさいますよ。向こうの山の中腹のところへお行きなさい。するとそこに、灌木の茂みがあるのが見えるはずですよ。その茂みの足元のところに、広い石の厚板があります。そこで馬上槍試合をしたいと、三回申し出るのです。そうすれば私の友情をあなたに差し上げましょう。」

ベレドルは歩を進め、茂みの側までやって来て、試合を申し出た。すると厚板の下の方から黒い男が現れた。その男は立派な馬に乗り、大きな光沢のある鎧を自分の身と馬とに着けていた。そして両者は戦った。

ベレドルが黒い男を地面に投げ飛ばすと、彼は鞍へと跳び戻った。そこでベレドルは馬から下りて剣を抜いた。すると黒い男の姿は消え、ベレドルの馬と男自身の馬も、彼と一緒に見えなくなり、その姿を二度と再び目にすることはなかった。

それからベレドルは山にそって進んだ。すると山のずっと向こう側の川の溪谷の中に、一つの城があるのが見えた。城のなかに入ると広間があり、戸びらは開いていた。入ってゆくと、足の悪い、白髪の男が広間の奥に座り、グアルッフメイがその側にいて、ベレドルの馬がグアルッフメイの馬と同じ厩にいたのが見えた。二人はベレドルを歓迎し、彼はその白髪の男の一方の側に座を占めた。すると一人の黄色い髪をした若者が、ベレドルの前にひざまずき、彼の友情を求めたのであった。

「殿。」と若者が言った。「私が黒い娘に姿を変えて、アーサーの宮廷へ行ったのです。それからあなたは盤を投げ捨て、イスビディノンギルからやって来た黒い男を殺し、それから鹿を殺し、厚い板のところにいる黒い男と戦われた。そしてこの私が血だらけの首を盆の上に載せて運び、切っ先から握りのところまで血が流れている槍を持って行ったのです。あの首はあなたの従兄弟のもので、彼を殺したのはカエル・ロイウの魔女たちなのです。あなたの叔父をびっこにしてしまったのも彼らです。そして私はあなたの従兄弟です。そしてあなたがこうして仇を返してくれることは、前もって予言されていたことだったのです。」

ベレドルとグアルッフメイは、魔女たちと戦うために来てくれるように、アーサーと彼の軍隊に依頼することに決めた。そして彼らは魔女たち

と戦い始めたのだった。一人の魔女が、ベレドルの目の前でアーサーの家の一人を殺し、ベレドルは止めるように命じた。もう一度魔女がベレドルの面前でアーサーの家を殺し、再び彼がそうしないように命じた。三度目に魔女がベレドルの目にいる前で家を殺したとき、ベレドルは剣を抜き、彼女の兜の頂上に切りつけたので、兜と鎧と頭の全てが二つに裂けてしまった。彼女は叫び声をあげ、他の魔女たちに逃げるように命じ、彼らと共に騎士の修行をし、彼らを殺すことを予言されていた男こそ、このベレドルだと言った。それから、アーサーと彼の軍隊が魔女たちに襲いかかり、カエル・ロイウの全ての魔女たちは殺されてしまったのであった。このように、「不思議の城」についての話は、語られているのである。

II

A 構成について⁽³⁾

以上その全体を紹介したことから分かるように、一つひとつのエピソードには面白いものがあるとはいふものの、この物語の内容は複雑に入り組んでいて、なかなか分かりづらいものとなっていることは否めない。全体は、次のような三つの部分に分けて考えられることが多い。

1. (a) 始まりから雪の上に血が落ちる出来事のところまで(『白い本』コラム一七―四五・九)。
(b) ベレドルと「黄金の手をもつアンガラッド」の話(『白い本』コラム一四五・九―一五二・二)。
2. 「黒い圧迫者」の物語から、ベレドルが女帝と共に行なう十四年間の統治までの話(『白い本』コラム一五二・三―一六五・二六)。
3. 「黒い娘」の到着から、最後まで残りの話(『白い本』コラム一六五・二七―一七八・三三)。

すなわち1.(a)の部分の物語は、かなりの分量のウェールズものの資料を入れ込んではいくが、本質的にはクレチアン・ド・トロアの「聖杯の物語」に則った再話ものであると考えられる。続く1.(b)と2.の部分、1.(a)で武者修行の旅を続ける騎士ベレドルの姿が、ウェールズ文学に最初に導入されたことに影響は受けてはいるとはいえ、大枠のところでは、ウェールズの物語の語り手によるそれぞれ独立した作品となることが分かる。また3.の部分の物語には、残された断片的な資料に基づいて、でき得るかぎりクレチアン流の物語に仕上げ、1.(a)の部分で提示した様々なテーマに結び付けて終えようとした苦勞のあとが見られる。すなわちこの部分全体がウェールズ人の再話者による、後からの付加と考えられるのである。また、1.(b)の部分と2.とをまとめて、三つに分類することもある。そしてこの2.の部分こそが、ケルトの伝統に準拠した物語だと言うのである。

次に、ケルト文学に独特に見られるテーマによって、全体の物語を四つの部分に分類している例を見てみよう。基本にあるのは、ベレドルの物語にはその背景に、失われた正当な統治権の回復と不当に加えられた侮辱に対する復讐を求めている、探索の旅のテーマが流れているといった考え方である。

1. 主人公の若者の誕生とその幼年時代の物語。広い世界へ出てゆくきっかけとなる出来事で終わる。
2. 王の宮廷を訪ね、そこで主人公が遭遇することになる様々な否定的な反応が、彼が出てゆく広い世界の敵意と反対への導入となる。
3. 異界の力に試みられ、鍛えられる主人公の冒険物語。彼の結婚によって終わる。

この間に、彼が世の中に出てきた目的が、統治権を求め復讐をとげるためのものであることが、象徴的な形をとって主人公に示さ

れる。

4. 妻の喪失が語られ、新たな試練と試みが繰り返された後での、最終的な主人公の旅の完成と、失われていた妻と領地の回復が同時になされたことで終わる。

こう見てくると、このベレドル物語においても、語られているのは主人公の若者ベレドルの成長の物語であり、これは『マビノーギ』の核をなすと考えられている、「四つの物語」の主人公ブレデリ物語にも見られる、ウェールズ物語文学の共通のテーマであることが分かるであろう。

B テーマについて

1. 探究

『マビノーギ』の「四つの物語」、そして「キルーフとオルウェン」の物語でも明らかな如く、生まれてすぐに母親(モドロンの)ところから姿を消してしまった息子(メイボン)を求めている探索の旅の物語は、ケルト神話によく見られる探究の一つの典型である。そしてこの探究の旅は、元々は母親に象徴される、主権並びに統治権の獲得の問題に結びついていることが分かる。

「四つの物語」の第一話、この四つの物語をつなぐ一人の王子ブレデリ(Peder)誕生にまつわるエピソードを語る「ダヴェドの王子ブワイス」(Pwyll Pendecic Dyuet)においても、ウェールズの南西部ダヴェドの領主にすぎないブワイスが、異界アンヌウン(Annwyn)の王アラウン(Arawn)の友情を得て、「アンヌウンの長ブワイス」(Pwyll Penn Annwyn)という称号を得るまでのエピソードに、一つの探究の物語の痕跡がはっきりと現れているのである。続く優れた力を持つ妻と結婚するまでのエピソードには、ある日「アルベルスの丘」(Gorsed Arberth)に、さびこからともなく現れた「古老(ヴェド)の娘リアンノン」(Riannon uerch

Heueyd Hen) と名のる美女がブレデリの母として登場してくる。生まれたばかりの息子ブレデリは、五月祭の前夜に姿を消してしまい、四年の歳月を経て、テイルノン (Teirnonn) という立派な領主の手によって、めでたくブウイスとリアンノン夫妻の待つ宮廷へ戻され、「ハンヌウンの長、ブウイスの息子ブレデリ」(Pryderi uab Pwyll Penn Annwyn) となると言う。これもまた喪失と回復の物語の典型となっていることが分かるのである。またブレデリの母リアンノンには、終始不思議な力を持つケルトの女神エボナ (Ebona) や偉大な女王を意味する「リガントーナ」(Rigantona) のイメージがつきまとっていることも分る。このように、ケルト物語の特徴の一つには、主権は常に女性によって象徴され、主人公は様々な試みと試練とを経た冒険をなし遂げた後、彼女と結婚することにより、初めて土地と王国の統治権を正当に獲得するといったパターンが存在していたことが分かる。

「四つの物語」の第三話、「スウィールの息子マナウェダン」(Manawydan uab Ilyr) の物語は、再びこの母と息子、リアンノンとブレデリが登場して展開される、ブレデリの二度目の喪失と回復の物語となっている。リアンノンの再婚相手となるマナウェダンの努力によって、ある日忽然と姿を消してしまったリアンノンとブレデリ母子は、無事ダヴエドの地に戻ってくるのではあるが、彼らの喪失と共に、この地には人家も人影も途絶え、完全な「荒地」(Waste Land) となってしまうところが、強烈な印象を残すところであろう。土地の豊穡と、人々の調和をもたらすために不可欠なものとされる母と子の結合の回復、それをなし遂げるために必要とされる父性の力に代表される様々な試練とを示す物語でもある。またリアンノンとブレデリの喪失にまつわるエピソードの中で、真っ白いイノシシを追って、今まで見たこともない城へ入って行く母と子、そこで見つけた黄金の鉢に手を吸いつけられ動けなくなる二人、響く雷鳴と降りてくる深い霧のヴェールの中に消え失せてすっかり見えなくなってしまう人と風景の様子

等、ケルト物語の神秘が余すことなく語られている物語でもある。以上見てきたごとく、この探究のテーマは、ケルト物語で多用される、魅惑にあふれる語りの典型の一つとなっているのである。

2. 聖杯⁽⁴⁾

「聖杯物語」は、十二世紀のフランスの宮廷詩人クレチアン・ド・トロアによって最初に書き留められ、広められた物語であるとされている。クレチアンのこの『聖杯物語』あるいは『ペルスヴァル』(Le Conte du Graal, Perceval) は、第三回十字軍に参加し一九一一年六月に亡くなったフランドル伯フィリップ・ダルザスに捧げられた、九二三四行にわたる未完の物語詩であり、成立は一一七五年から一一九〇年頃にかけてのことと推定されている。

この物語詩のなかで、前半の主人公ペルスヴァルが聖杯に遭遇するのは、傷を負った漁夫王が釣りをしている川の側の、幻のような立派な城の大広間へ迎え入れられたときのことである。彼は金髪の乙女が送ってきたばかりという、彼のものと「決められ運命づけられていた」(二二六行) 剣の贈り物を受ける。その後で、血の滴る槍、燭台、聖杯(宝石を散りばめた金製の「小鉢」あるいは皿)、銀の「肉切り皿」からなる謎めいた行列が通過するのを目撃したと言う。この聖杯にすっかり魅了されたペルスヴァルは、槍が血を滴らせているのはどうしてなのか、またこの聖杯の給仕を受ける人は誰なのかという思いにとりつかれるようになり、それらの答えを求めている探究の旅にでかけることになるのである。しかしペルスヴァルの探究の旅は途中で終了してしまい、物語の後半の主人公はアーサー王の宮廷の別の騎士ゴイヴァンのものとなっている。

その後この「聖杯物語」に、新たに様々なエピソードが加えられ、全ヨーロッパとイギリスに広まってゆく。典型的なものはドイツの詩人 W・ヘッセンバッハ (Wolfram von Eschenbach) の『ペルスヴァル』(Parzival) やイギリスの C・T・ホロリー卿 (Sir Thomas

Malory) の『アーサー王の死』(Le Mort de Arthur) 等に代表される物語で、より明らかにされる聖杯探究のイメージである。アーサー王の円卓の騎士の結束を乱し、結局のところ、理想の王国として発足したログレス (Logres) 王国を滅亡に追いやる原因の一つとなってしまうこの聖杯探究を巡っての騎士たちの争いは、無垢なる若い騎士ガラハッド (Galahad) の手によって成し遂げられることになる。

また、この系列の他にも、ヨーロッパ諸国やブリテン島へのキリスト教の布教と共に生まれたと考えられる「聖杯物語」の系列も存在する。十字架上で刑死したキリスト・イエスの体をピラトから譲り受け、自分のために準備していた墓へ丁重に葬ったといわれているアリタヤのヨセフ (Joseph of Arimathea) の登場する物語である。

ここでは、槍は十字架上のイエスの横腹を刺し貫いた槍、短剣はそのとき使われた受難の道具となり、聖杯は最初のブリテン島布教の際捕らえられたヨセフの飢餓を救い、食事を提供し続けたという奇跡の器となっているのである。

しかしながらこの不思議な器の存在も、すでに古きケルトの物語に見られるものである。まずすぐに思い浮かんでくるのは、「四つの物語」の第二話、「スウィールの娘ブランウエン」(Branwen uerch Llŷr) の物語の中に登場する薄幸の女主人公ブランウエンの兄である、ベンディゲイドブラン (Bendigeidfran) が、彼女の夫となるアイルランド王マソルッフ (Matholwch) に贈ったといわれる再生の大鍋である。一夜の中に戦いの死者たちを生き返す力をもったこの鍋は、元々はアイルランドから渡ってきた不思議な道具の一つである。やがてアイルランドとウェールズの激しい戦いは、両方の国の土地と人々を疲弊させる不毛の戦いによって終わり、大怪我を負った巨人のベンディゲイドブランの首は、ウェールズの七名の戦士たちによって切り落とされ、彼らと共に長い放浪の旅を続けた後、再びブリテン島へ戻り、ロンドンの地に葬られたと言う。この首のイメージは、「ペレドル物語」での盆に載せられて運んでこられる、あの血染の首

と重なってはこないだろうか。最も古い成立と言われる「キルーフとオルウェン」の物語における美女オルウェンの父、巨人の首領イズバザデン (Ysbaddaden Benicawr) の最後の首切りのシーンが思い出されるところでもある。

III

女性に象徴されている統治権を求めての探究と復讐の旅のテーマや、不思議な聖杯のエピソード等は、数々の物語に素材を提供して、ヨーロッパのロマンスものに生き残っている、ウェールズの語りものの伝統であることが、あらためて確認されることであろう。この「ペレドルの物語」においては、物語の語りの様はいささか統一を欠き、エピソードの推移が錯綜して、ぎくしゃくしているという欠点があるとはいえ、物語を面白くさせる様々な要素には事欠かない。いずれもウェールズの物語の一つの特徴となっている独特のユーモアと、絢爛たる色彩の世界が展開されていることも分かる。

まず息子との平和な生活を夢見て森に隠れ、戦いとは縁のない女や子ども、そして穏やかな人々との暮らしを選んだ母親の元から、「天使」のように見える騎士になるために旅立ってゆく若者ペレドルの雄姿が、真に滑稽に描かれている。痩せこけた青白い馬、鞍の代わりにつけられた荷籠、剣の代わりに手に一杯のひいらぎの投げ矢を握って、少年はいそいそとアーサーの宮廷へ出かけて行く。よりにもよってこんな風体で現れた若造を、客人として滞在していた男女の小人たちから「騎士の中の華」と褒められて、すっかり面目を傷つけられる頑固者のケイ。王妃グエンヒヴァルに加えられた侮辱に対する報復を果たしに行かされまいかと一斉に顔を伏せる、アーサー王の宮廷に侍る立派な風采の騎士の面々。見栄えは悪いが、次々と一騎討ちの騎士たちを倒してゆくペレドルの圧倒的な強さ。これらの情景が、いずれもユーモラスな対比を持って語られているのが分かる。

そしてまた、野性の鷹に襲われたアヒルの流す血潮の紅、その肉を狙って舞い降りてくる鳥の漆黒、そして雪の純白に、恋人の頬と髪と肌を思い出して夢想にふける若者ベレドル。川の一方の岸で草を食む白い羊は、一頭ずつ川を越えてやって来ては、それぞれに黒や白にその色彩を変えと言う。同じ川の岸に、一本の樹が立つ。片側は根元から梢の先まで燃えるような赤、そしてもう一方の側は緑の葉で覆われていると言う。色とりどりに張られた沢山のテントの様子。いずれも息を飲むような色彩の競演である。エニシダの花の黄色よりもいっそう黄ばんだ長い歯をした醜い黒い女。一つ目の「黒の圧迫者」と赤い馬に乗り、赤い鎧を身に纏った騎士「赤い剣のエディリム」等、登場する人物たちも一様に色彩豊かな面々となっているのが分かる。

洞窟に住み、毎日一人づつ騎士を殺すという化け物アダングを始めとして、「悲しみの小山」にある塚の中に住む蛆虫、そして「丸い谷」の城の入り口を守る、門番のライオン等の不思議な動物たちも次々に登場する。ウェールズのチェスと言われるグリスプスのゲームを自ら遊ぶ一対の駒たち。川で魚釣りに興じる「びつこの王」。話の中にだけ登場する「不思議の城」を求めての旅のエピソード等が忘れがたい印象を残す。まさにケルトの奔放な想像力の生んだ「不思議話」の世界がこれでもかこれでもかというように展開されているのである。

アーサーの宮廷からやって来た騎士たちの姿に憧れて、母親の元から広い世界へと旅立って行った若者ベレドルの冒険は、数々の試練を乗り越えて、主権者であるコンスタンティノーブルの女帝を妻に迎え、アーサーの宮廷の立派な騎士の一人に加えられることによって終わりとなる。その過程に於いて、彼に手を貸してくれたのは、全て母方の血筋を引くと考えられる、この世の者とは思われない特別な力をもった人々であった。そして面白いことに、彼の果たすことになる復讐というのは、全て母方の係累たちに加えられた侮辱に対するものである。こうして成長してゆくベレドルは、母の束縛から離れ、社会性をもった父権世界へと旅立つ存在であったと考えられる。して

ると、この物語の最後に置かれた「不思議の城」の物語において、ベレドルと親友のグアルッフメイが、アーサーの宮廷からの軍勢の援助を求めて、カエル・ロイウの魔女たちを全滅させるというエピソードの持っている象徴的意味合いは、極めて深いと言えるであろう。母性社会の論理で生きてきたケルト人の国ウェールズが、父権社会を旨とするアーサー王の宮廷に代表される、アングロ・サクソン王国に完全に制圧される日が近づいていることを、奇しくも予言するような結末となっているからである。

この「ベレドルの物語」は、『マビノーギ』の中に含まれるアーサー王物語群の第四番目に位置する物語である。ここには既にもう、あの「ギルファとオルウェン」の荒々しくも壮大な物語の面影は見られない。「ロナヴィの夢」に見られた磨き抜かれた美しさにも欠けている。そしてまた、「泉の貴婦人」の神秘的でロマンチックなケルト的要素にも乏しく、ウェールズのケルトの物語の変化の中でも、より後代に属する物語なのである。次に続く「ゲレイント物語」の中で、決定的となる、文学の中の全てのロマンチックな要素を打ち壊すノルマン・フランス風のロマンスに顕著な、形式主義の影に完全に染まっていた最後の物語である。所々に散りばめられた美しく忘れがたい叙述は認められるものの、構造上からいっても、物語の構成には動きが感じられず、ぎこちない組み立て方であることが分かる。各エピソードから次のものへの移行にも、滑らかさは感じられない。最後につけられた、全体の物語に何とかまとまりをつけようとする試みは、失敗に終わったと言う他はない。たとえその中に、どんなに美しい表現が見られるとは言え、これでは到底完成された芸術作品とは言えないであろう。「自然で自在なウェールズ固有の文学が、新しい異国の趣味に適應しようとした結果被ることになった、犠牲の大きさを見る一例である」とする指摘も充もと感じざるを得ない。

ウェールズの社会が完全にアングロ・サクソン化される以前の、文

化的侵略の過程において、圧倒的な力をもって迫ってきたのが、大文
化であるノルマン・フランス風のロマンスものの語りの魅力であっ
た。やがて古きウェールズの実在の人物に、その原型を見るベレドル
は、様々な変容を加えられたのち、アングロ・サクソン王国の結束を
誇示する、アーサー王と円卓の騎士たちのヒーローの一人、パーシヴ
アル卿として華しく蘇ってゆく。しかし結局のところ、彼の聖杯探究
の旅を一因として、最後にはこの理想の王国も滅亡してゆく運命にあ
るのである。武力によってかち取られた国家的統一も、さしもの古き
被征服民ウェールズ・ケルトの物語の持つ、呪いにも満ちた滅亡の魅
力の前に、あえなく崩れてゆく運命にあったのかもしれない。
優れた物語の所有する、抗いがたい祝福と呪いの一例がここにあ
る。

注

(1) 本稿は、私の論文『『マビノーギ』研究(1)』(9) (山梨英和短期大学
「紀要」第十九号〜二十四号(一九八五〜九〇年)、並びに大妻女子大
学「紀要―文系」第二十四〜二十六号(一九九二〜四年))に続くも
のである。

(2) 使用テキストは主として、

A. ウェールズ語版、

1. J. Rhys & J. Gwenogvryn Evans (eds.), *The Text of the
Mabinogion and Other Welsh Tales from the Red Book of
Hergest* (Oxford: Clarendon Press, 1887).

2. J. G. Evans (ed.), *The White Book of Mabinogion* (Pwllheli
: printed by editor, 1907).

B. ウェールズ語並びに英語版、

Lady Charlotte Guest, *The Mabinogion from the Llyr
Coch Hergest, and Other Ancient Welsh Manuscripts,
with an English Translation and Notes* (London: Longman,
Brown, Green, and Longmans, 1839).

C. 英語版、

Gwyn Jones & Thomas Jones (trans.), *The Mabinogion*

(London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1949), 249°.

(3) Glengs Goetnick, *Peredur: A Study of Welsh Tradition
in the Grail Legends* (Cardiff: University of Wales Press,
1975) 参照。

(4) Roger Sherman Loomis, *The Grail from Celtic Myth to
Christian Symbol* (Princeton: Princeton University Press,
1991) 参照。

(5) T. P. Ellis M.A. & John Lloyd M.A. (trans.), *The Mabinogion*
(Oxford: Clarendon Press, 1929), Vol. II, 'Introductory Note
to Peredur', P. 71.